

プロレタリア通信

第43号
 2005年10月1日
 定価100円
 豊島区西池袋
 2-38-6
 第一後藤ビル4F
 豊島文化社
 TEL・FAX
 03-981-2887

プロレタリア国際主義の旗の下

自国帝国主義打倒!

世界資本主義の危機を

世界革命へ!

羽山 太郎

差・所得格差を生み出してきていることは考慮されねばならない。国境問題は、日清・日露における侵略の中でのものであり、歴史教科書とはまたつい最近、数十年前の侵略の是非を問うものである。われわれの敵は、日本の独占資本とその利害代表部の政治委員会＝自民党・民主党を初めとする議会議政である。いうまでもなく、労働代官・労働貴族もまた味方ではない。われわれはロシア・中国・韓国の青年労働者・学生・人民と共通の利害を共有するのである。

石原慎太郎・小泉純一郎に代表される政治屋の危機意識は、日本独占資本主義の危機の表現形態に他ならない。「靖国」に始まる歴史の偽造は危機のイデオロギー的表現としてのナチズムである。

中央集権・ブルジョア独裁打倒!

1950年代の中小企業合併、1960年代の産業別合併を経て、今日の産業構造の変化は、より速く、効率よくということ。かつてはスピード・効率・利便性の財政投融資をもって、治水治山を名目とするダムを初め、道路・鉄道・港湾を軸とした。鉄とセメントを軸に発展してきた。このことは同時に地方を切り捨て大都市圏の形成と

ランス・日本帝国主義の台頭による世界市場の奪い合いによる混乱。この一定の政治的妥協を旨とする頂上会議こそがサミットを可能とした。帝国主義争闘と階級闘争の激化こそがサミットを必然化させた。

今日、ロシアと中国は猛烈な勢いで生産力を増強し、強者の論理を資本主義なみに押し進めている。社会的ヒズミ、弱者切り捨てはわが日本帝国主義に匹敵するほどである。日本帝国主義は1950年、戦争特需を経て、生産手段の再編・再構築、そ

してエネルギー革命をもって1960年代の高度経済成長をもたらした。犠牲となったのは数百万戸の農家であり、二千万人を下らない農民である。農村地域は解体した。寄せ場は全国に広がった。

今、ロシアと中国はまさに社会の構造的ゆがみをもたらしつつも、走り出した生産様式・資本主義的生産力を止めるすべを持たない。まさしく、この力、この力こそが日本帝国主義の市場を脅かしているのである。日本帝国主義による反中国・

反韓国のイデオロギーこそは、奪われつつある市場の危機に怯えている姿以上のものではない。ロシア・中国・韓国・インドは、その国内市場のみならず、西欧・北欧をはじめ北米市場に乗り込むほどの技術力・生産力を用いるまでになってきている。戦後賠償に始まるODAのおかげという古色蒼然たるブルジョアイデオロギーは心情的悔しさを表しているに過ぎない。「自由」他人のものを奪う「民主主義」多数(暴力を含む)による少数抑圧」の押し売りは

ど恥知らずはないであろう。ブルジョアの競争、帝国主義的市場再分割に参入したロシア・中国・韓国は日本帝国主義にとって脅威である。われわれは万世一系のイデオロギーによる「大東亜共栄」を拒否し、あくまでもプロレタリア国際主義を行動で示す。過去・現在・未来を事実認識に基づいて判断するなら、中国・韓国の民衆蜂起、「反日行動」を断固支持・連帯する。(とはいえず、中国民衆は自らの内部に5の民族を有し、かつ域内格

1960年代帝国主義の危機はドル・ポンド体制の危機としてあり、それはついに外為為替の変動相場制に移行した。その主な原因は戦勝国北米のドル散布に始まり、日本・ドイツの台頭にあり、同時にキューバの独立に始まる民族解放闘争の高まりと北米・ドイツ・フランス・韓国・日本などの青年労働者・学生の決起による階級闘争の高揚であった。

民族解放闘争に連帯する青年労働者・学生をはじめとする階級闘争の高揚と、ドイツ・フ

めどない環境破壊の限りを尽くしてきた。

技術・商品輸出、従って資本輸出は、国籍をもちつつも国境を越えてヨーロッパ・アフリカ・南米を問わず進出している。アジア諸国・アフリカもまたかつての囲い込みの植民地というよりは無防備に世界市場に投げ出されているのである。

資本の論理からすれば現状維持では潰される。拡大再生産を続けなければならない。資本は、効率よく世界市場を駆けめぐるために自ら中央集権を求めるのである。「国民経済」とはその原始に過ぎないのであって、今日の産業構造的には徹底したスピード化が求められているという事。ここに電子化・情報の送受信の発達がある。

資本のキーワード「スピード・効率・利便性」。このキーワードには、個別資本は市場から駆逐されるのである。このキーワードに乗り上昇してきているのが、ブラジル、インド。韓国、中国、ロシアである。おれら国々は地下資源はもとより人的資源も含めて、日本帝国主义・北米帝国主義を凌ぐであろうことは言をまたない。

日本・北米帝国主義の危機意識は新興資本主義に追いつかれようとしているのみならず、既に自国市場にこれら諸国の商品があふれ出てきていることにある。電子産業においても世界

は平準化されつつあり、いまだ優越性を保っている「知的財産」と宇宙産業分にも遅かれ早かれ平準化されるであろう。つまり、いわゆる「グローバルな資本主義・多国籍企業」は北アメリカの代名詞ではなくなる。中国も韓国も中東・ヨーロッパにいわゆる多国籍企業を有しており、世界市場の再再分割戦争は24時間・365日休むところを知らないのだから、人間は休むことあつても資本は休まない。こうして文字通り金融資本主義となつたのである。

まさにこのことが帝国主義としての日本を二流化せしめている。このことはアジアにおける政治地図においての変化であり、地政学的にもアジアにおいて中国と韓国は有利な立場にある。

石原慎太郎・小泉純一郎は経済学上の無知を政治的に乗り切るうとしていたのである。都民・国民に本当のこと(歴史上のこと、経済上のこと)を隠して、アジアーションとしてのナショナリズムを吹聴している。石原と小泉は、弱い者はより弱く、強い者はより強く」という中央集権主義国家を目指している。ブルジョア的の社会政策すら切り捨てる。

『年誌』6号の植村論文、北村論文を是非一読していただき。老人や障害者の介護・医療費の自己負担増、いざれもこれからは所得税とは別に科目別税がむしり取られることになるであろう。他方でやっかいなことは「地方分権」の名の下で分離されるであろうが、いざれにしても弱者切り捨ての法律は、公明党・民主党ともに公言しているところである。

帝国主義打倒へ！

われわれは、アジア・アフリカ・北アメリカの労働者・農民・人民とともに帝国主義打倒に邁進するのみである。

われわれは石原・小泉と対極にあり、日本独占資本主義を倒すと本気で考えているなら、まず第一に農産物の輸入禁止を打ち出すべきである。「農産物の輸入禁止」とは第一に北アメリカと敵対する。日本の独占資本のなかでも多くの自動車産業は倒産する。家電業界も半減する。われわれは今日の利便性を放棄しなければならぬ。

よろしいか、同志諸君。イデオロギーとして石原や小泉に反対し、「憲法改悪反対」を言っても、ノミの一飛びほどの痛みも与えることはできない。彼ら右翼は現実の実態に乗っかってデマゴギーとしてのイデオロギーを吹聴しているのだ。われわれはこの現実の実態に迫らなければ何らの迫力もないことを自覚すべきだ。スクラムと街頭はど

んな主張の下に実行するのか。石原と小泉は靖国を賛美しているから良くない！その通り。だがしかし、彼らが今、今日、その行動を取らしめる社会的現実を見つめなければならぬ。これこそが日本独占資本主義の陥っている危機だということ。

わが親愛なる同志諸君。われわれの帝国主義打倒闘争とは、一台の自動車も輸出させないこと、一台のテレビも輸出させないこと、労働者と農民の連帯は「産直運動」のみではない。お互いに将来にわたる利害で一致しなければならぬ。共に生産者として社会を担う以上、大上段から「天下国家」を論じ、世界の労働者農民と共同・共通の利害を見出さなければならぬ。利益も不利益も分かち合う信頼関係の構築なくして、国際主義としての自国帝国主義打倒もなし。

「衣食住」足りて、金融資本とIT産業にうつつをぬかすブルジョア階級打倒！
世界革命・日本帝国主義打倒！

したがって、労働者、農民など全勤労人民は、経済的、政治的、文化的すべての面でブルジョアの政策に反対し、改良、改革闘争を闘いつつ自らを革命的

※(3ページ末尾より)

家権力、国家機構は反勤労人民的、反プロレタリアの本質・立場をもっているものであり、勤労人民・プロレタリアの本質・立場とはまったく異質であり、敵対的であり、これを「奪取」して、革命に役立てることは不可能である。

これは全勤労人民の力によつて打倒し、全勤労人民の自己権力によつてブルジョア国家・生産関係・階級関係の廃絶のためのプロレタリア独裁を貫徹する以外に道はないのである。

☆ブルジョア民主主義の発展がプロレタリア民主主義の結果するような捉え方は、徹底的に幻想にすぎず、前記したように闘う大衆の意識の變化であり、ブル民がプロ民へ変化することは絶対にありえない。これはブルジョア国家はあくまでブルジョア国家であつて、自然にプロレタリア国家に変化する事がないのと同様に、ブルジョア民主主義は、いかに発展しようがブル民でしかありえず、ブルジョア独裁の一形態にすぎない。

したがって、労働者、農民など全勤労人民は、経済的、政治的、文化的すべての面でブルジョアの政策に反対し、改良、改革闘争を闘いつつ自らを革命的

的大衆へと形成し、自己管理能力を獲得しつつ自己権力を樹立し、ブルジョア国家権力を打倒し、プロレタリアート独裁を確立しなければならない。

☆「この共産主義的意識の大衆の規模での創出のためにも、事柄そのものの敢行のためにも大衆的規模での人間変革が必要である。この大衆的規模である人間変革は、実践的運動のなかでのみ、一つの革命においてのみ進捗しうる。かくて革命は、他のしかたでは支配階級は打倒されないという理由だけでなく、打倒する階級が革命の中でのみ、古い残しを我が身から一掃し、社会の新しい礎石を築く能力を持ちうるという理由から」(ドイツ・イデオロギ

かくして、われわれは、労働者、農民など全勤労人民による自己権力を組織し、ブルジョア的國家権力に対して二重権力状態を産出して、ブルジョア的國家権力を、全勤労人民の力で粉碎し、自己の権力を確立しなければならない。

(了)

したがって、労働者、農民など全勤労人民は、経済的、政治的、文化的すべての面でブルジョアの政策に反対し、改良、改革闘争を闘いつつ自らを革命的

二重権力状態の創造と、全人民の自己権力によるブルジョア国家権力の打倒粉碎

——プロレタリア独裁の樹立！

森田 典彦

革命的権力の樹立は二重権力状態の創造と、全人民権力によるブルジョア国家権力の打倒粉碎によるプロレタリア独裁の樹立でしかありえない。

はじめに

われわれにとって、共産主義革命実現のためにどのようにして、全勤労人民がブルジョア的國家権力を打倒し自己権力を確立する(できる)かは、われわれの闘争のあり方を規定するものとして極めて重大な意味をもつ。

労働者・農民など全勤労人民の搾取、抑圧に対する大衆闘争をとうしての自己権力という点では、ほぼ暗黙の了解を前提(バンド、新左翼では)としているとはいえ、明確に理論的含意があつたとはいえない。したがって、ここでは、その追求を主として行ふ。しかし、党の位置付け、役割までは及んでいない点が問題として残る。

そして、権力の樹立をあえて政治革命と言ひ社会革命と分離し、どちらが先行するかというより政治革命先行説に対する批判的意見を主としての議論などがあり、私にとつては極めて不明確な点が多い。市民社会論、プロ独論、民主主義論などなど。

ここでは、いわゆる政治革命は社会革命に必然的に内包さ

れること、プロレタリア人民の自己権力の樹立は二重権力状態の創出と、プロレタリア自己権力によるブルジョア國家権力の粉碎によるプロレタリア権力の確立という点を追求する。しかし前記の如く、党の位置付け、役割については、私なりに意見はあるが、ここではまだ触れていない。

自己権力の樹立は社会革命の決定的契機——いわゆる政治革命は社会革命に内包される！

労働者・農民など全勤労人民が自己権力を組織し、ブルジョア國家権力を粉碎し、ブルジョア國家権力を解体し、現実的に生産関係を止揚し、ブルジョアの私的所有を生産手段の共有に基づく自由な諸個人の所有へと変革するため、自己権力へとプロレタリアを組織、確立するということを政治革命というのなら、政治革命というのは社会革命の不可避的の一過程であり、当然社会革命に内包される。

たしかに、社会革命にとつて全人民の自己権力の樹立は極めて決定的な意義をもっている。しかし、それまでのブルジョアジーの全政策に対して反対し、改良・改革闘争をとうして、闘う人民が自己変革的に共産主義的の革命意識を自覚的に準備しなければ、すなわち、排他

的利己主義的で他の人間を自己の生存のための手段と考える市民(ブルジョア)的汚物を止揚した人間、あるいは社会的人間として自己変革しないならば、生産手段の共有に基づく自由な諸個人の連合としての社会の実現は不可能であろう。

したがって、社会革命は、一連の、権力樹立までの闘い、権力の樹立、政治を止揚し、生産関係を変革する長期に渡る闘いであり、決定的とはいえず、自己権力の樹立は社会革命の一過程として社会革命に内包される。

二重権力状態からブルジョア國家権力を粉碎
出来あいの國家機構は労働者階級の目的へ役に立たない

労働者・農民など全勤労人民は、ブルジョアジーの國家権力を打倒して自己権力(全人民評議會)を確立することによつて、はじめてブルジョアジーの政治的支配を覆し、ブルジョア國家機構を粉碎し、ブルジョア的生産関係を變革し、排他的な私的所有、階級関係を廢絶し、生活・生産手段の共有と協働に基づく、開かれた自由な個人的所有を実現し、人間の人間らしい社会的人間の社会を実現するための現実的政策を実施しはじめることができる。

「資本主義社会と共産主義

社会のあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応して、また政治上の過程がある。この時期の國家はプロレタリアートの独裁以外のなものでもありえない(「ゴータ綱領批判」)。

われわれ共産主義者はプロレタリアート独裁の社会的中核的働き手にならなければならない。だが、プロレタリア権力の組織化は、ブルジョア國家権力の「奪取」ではなく既存するブルジョア國家権力に對立する全勤労人民の自己権力を組織し、二重権力状態を実現し、後者による前者の打倒によつて、ブルジョアの國家機構を粉碎し解体しなければならない。プロレタリア権力の確立は、議會議主義的、ブルジョア民主的ではなく、まさに全勤労人民の力によるブルジョア國家権力の打倒しがありえない。

できあいの國家機構は労働者階級の役に立たない。
なぜなら「労働者階級は、できあいの國家機構をそのまま掌握して、自分自身の目的のために行使することはできない」(フランスの内乱)からである。

常備軍・警察・官僚・裁判官という、いたるところにゆきわたつた、体系的で階層的な分業の方式にしたがって造りあ

げられた諸機關をもつ中央集権的國家権力は、労働に對する資本の全國的権力、社会奴隷化のために組織された公的権力、階級專制の道具という性格をますます強めるようになった。議會的民主主義というブルジョア民主主義的形態をとっているものの、その実、階級專制のための法律を次々と産み出して

ブルジョア民主主義は、いかに發展・拡大しようともあくまでブルジョア民主主義にすぎず、これが發展して人民のあるいはプロレタリア民主主義へ転化するとはありえない。もちろん運動的に言えば、ブルジョア民主主義を抽象的一般的民主主義のように考へて運動しているうちに、ブルジョア民主主義的幻想に氣付き、被搾取者、被抑圧者の反ブルジョア民主主義的プロレタリア民主主義に大衆的に變化、移行することはありうるが、ブルジョア民主主義は飽くまで變ならず、ブルジョア的生産関係の維持のためのものであり、その技術的變化にすぎず、ブルジョア社会の危機が深まるにつれて專制へと變化するものである。

そして、ブルジョアジーの分派間の対立も社会の危機の進化したに伴って、ブルジョア的生産関係維持のために一致團結するのは必然的である。

このように、ブルジョア国
※(2ページ5段目へ)

JR尼崎列車大事故から 何を汲み取るべきか

～JR現場労働者の座談会～

相模：三回にわたって坂本論文をいわゆる国鉄労働運動の現段階というかたちで掲載させてもらった。その掲載が終ったときくらいに尼崎の大事故があった。戦後の列車事故のなかでも大規模なものだったわけですが、実は私六〇年代の後半ころ三年ほど尼崎にいて、当時の福知山線というのを見ていたんですけど、非常にのどやかな線だったのですけど。

一応われわれ外から見ている、マスコミ報道しか接していないんですけど、一番感じたのは今度の事故が民営化以来のひとつの凝縮だということですね。民営化以降利益第一主義、効率主義、とくに人べらしが大々的に行われたということ、ひどい超過密ダイヤが行われているということ。

それから例の日勤教育に代表される労務管理体制。それらのなかで非常に非人間的な殺人的な現場、という感じがあって、そういうなかで引き起こされた事故だったということが、マスコミ報道のなかでもそれが印象に残っているのですけど。

それはまあ外から見た話なのですけど。だから最初にくに現場で携わっているかたのほうから、今回の事故で一番ぱっと感じたことを、第一印象

というか、そういうことから話してもらえたらとおもうのですけど。

何故脱線が？！

平：第一印象……。実際にまず最初カーブをふくめてすぐですけど、まず最初に聞いたときに脱線ということ、ありえないと思っただけです。自分

は後ろに乗っているのですけど、運転手の感覚からいって、自分ちそれだけの教育を受けているからその意識のなかでハンドル握っていると思っただけ。あとでマスコミでいろいろ、その前にもオーバerranがあったとかいろいろあったのを聞いたし、その前にもいろいろ失敗があったということもあると思うんですけど、なぜあそこでスピードを落とさないのであるか、本人が今いないけど、考えられないなと思ったのですよ。

そのなかのからみでいろいろな教育のしかたがどうのこうのってあるんだけど、とにかく不思議で不思議でしょうがないかったですよ。

高山：私も職場にいまして、画像がくるのが早かったんですよ。私一〇時くらいにはもう画像を見ていたので、マスコミでもいわれているように、すい

い軽量車両でべっちゃんこなんですよ。あれを見てあーこれは人災だなと、というふうに思いましたね。

最初踏み切り事故とか、置き石とか言われてましたけど、置き石だとか踏み切り事故であそこまで電車がとぶのかと、航空事故みたいな感じで、やはり彼が言われたみたいに不思議というのがまず頭にありました。なんで脱線したのか、それが第一印象です。

西田：第一印象としては、その後のマスコミ、JR総連系の組合の運転手やOBがテレビに出てコメントしていて、そっちのほうを見ましたね事故自体より。これはJR総連が前から主張していた、東日本は素晴らしい会社だ、西日本や東海、九州はわれわれを弾圧するひどい会社だ、不当労働行為を細かにあげる、その宣伝のかつこうの材料にされたな。なるだろうなと思っただけなら案の定になりました。

あとマスコミにも出たのですけど事故をおこした運転手がこれまでも何回もオーバerran、運転の未熟があったということ、それに関連して日勤教育という見せしめ的な再教育とは言い難い、まっとうな再教育じゃない、仕事はずし、懲罰的な再教育、その実体がばくろされてきた。

それについて思ったのは国鉄末期からJR新発足のあの時期に私たち国労組合員がやられたのと同じだなと。当時首都圏の電車区で血の入れかえが行われ、北海道が多いですけど来た動労組合員がDLからELへ転換教育がうまくいかないでオーバerranなんていうのは日常茶飯事、という時期があったんです。それも思い返して、最近はいつてきた若い社員にあんなの昔は日常茶飯事でした、という話をしたのは覚えてる。

村井：そのとき私は仕事だったんですけど、当初西日本の発表は乗用車と衝突だ。あのへんの西日本のマスコミにたいする対応のまずさ、それが一番印象に残っている。

ちよつと本題からずれますけど東と西のちがいで。というのは旧国鉄時代に国鉄本社があったらもう国鉄本社の記者クラブがある、ときわクラブという。それが分割民営化になって、東京に東日本の本社が残ったものでそのときわクラブは、変わってはいらぬと思いますけど独自に残っている。マスコミ対策としてこちらの情報を提供するかわりに握りつぶすということとは東はやるわけです。

西日本の場合はマスコミ対策のまずさというのが一番印象にのこった。

さきほど相模さんいわれ

ましたけど超過密ダイヤというのでマスコミに言わせたら、四十分くらいの間隔で。それだったらこちららは超をもう三つもつけなければという感じですけど。

村井：山手線なんか二分、もつとか。

村井：そういう意味で過密ダイヤの問題というよりも、あそこは事故があつてから知ったのですけど、昔あつた線じゃないとこを通っているわけですよ。ある程度車両の性能アップ等でもよいのだろうと思うのですけど。最近この二十年くらいでできた新線というのはそんなにいいですよ。武蔵野線であるとか、新幹線とか、それ以外に昔から、SL時代から線路を使用している。専門家じゃないとわからない話だと思っただけ、線をつくるにあつたつての立地条件とか、線路の引き方とか、そういうことからはあれだけの高速運転にもと耐えられないような線だったというのは疑問が残る。

あと電車運転手になるのは昔大変なことで、入社して二年くらいたつてやつと機関助手とか車両係りとかになって、それから乗務員になった、乗務員になるまである程度年数経過しないことにはなれなかつた。しかも最大条件として運転業務の経験

が二年半、以上の経験がないとその試験が受けられなかった。

ところが東日本なんかこの二、三年でかわりました。この間までは一年現場にいて、二年間車掌やって、四年目ではもう運転手になるのがいたわけ。そういった急激な登用が、試験を受かったんだから問題なかったにせよ、そういった鉄道員生活の未熟さというものもあつた事故の要因の一つにあげられるんじゃないか、というのが感じられたことです。

坂本：私も当日は仕事で、いきなり相番の人間が西のほうでえらい事故が起こっているぞと話聞いて、テレビ見たらすごい状況で、脱線しちゃおかしいなという感じ。あといろいろ聞いて、会社側の対応は事故隠しの面と、もう一つはいま周りの人も言っていたけれども単に技術上のミスではなく、そういう線路の問題とか車両の問題、そういう複合的な要因が重なったある種の人災じゃなかと。というのが第一印象だった。

相模：一番最初言われたんですけど脱線したか不思議だったという、それはいろいろな意味があるかと思うんですが、実際現場で働いている人から見

たとき、なんでああいうことが起きるんだという、そこんとこで後の人が言われた線路の敷設のしかた、それから車両の問題、それから運転手の登用のしかたもふくめて運転技術なりといったものがどういふふうな職場のなかで継承されてきているのか、そういう問題が一つあるということ。それと会社の事故にたいする対応のしかた、会社が事故をどういふものとして受け止めたのかという、とくに事故隠しというかたちで出た、その会社の対応のしかた、ということがあつたかと思うんですが。

軽車両化と車両整備の問題

前者の問題でもうちょっと突っ込んでいきたい。ひとまわりしたところでSさん、もう一回最初のところの内容を……

旭：ちょっと質問ですけど軽車両というのは前から問題になっていたんですか。

平：問題はあつたんですよ。坂本：国鉄時代は鉄で作っていたから車両も重かった。それがJRになってから軽量化という形で。昔は冷房がなかった、車両の冷房をつけた関係で車両そのものが不安定だと、あと路盤の関係、さっき彼もいってけど今の線路は最初に鉄道ができて

から三つ目になつてきているわけだから、そのたびに直しているわけだから路盤がはたして……。JRになつてから線路保守もいにかげんだから、そういうことも含めてそういう構造的な問題がある。

平：今の軽量化の問題からゆくと、今は使い捨ての車両をつくると、だから何十年も使わなくても良いんだよと、そういう車両作りと、今の車両よりは半分くらいの値段で作ろうと、そういうことで軽量化になつていっているんですけど。逆にいうとそういう軽量化がコンピュータ化されて、検査係がいるのですが壊れても直せない、そういう車両になつてきているんですよ。ですから運転手がちょっと調子悪いよといつても、調べに行つてもわからない車両に今なつてきている。コンピュータ化が良いか悪いかは別に。レールのほうも重いレールに今なつている、60kgとか、ただレールとか良くしても線路とか調べる作業が国鉄時代にくらべてかなり減つていっているんじゃないかと思うんですよ。たとえば電車に乗って施設関係が架線見るとか、枕木見て異常ないよとか、程度で終わらせて、検査する期間そのものがだいぶ伸びているはずなんです。

ただ、さっきも言いましたけどなぜあそこであんなスピードを出すのと、いろんな条件があつたんだらうとは思っていますけど、だから本人に聞いてみたいんですけど、その点について……。だからといって後で車掌は非常ブレーキをかけるような教育も受けてませんし。そういう意味じゃ運転手にまかせているわけですから、そこで後でブレーキを危ないときはひきなさいといふことは言っているんですけどそれは違ふと。東日本のほうでも会社のほうから危ないときはひきなさいと言っているけどそれは違ふよといふことで訂正は来ているんですけど。

ただあれだけ多くの亡くなった現実を見たときに、最小限のことでゆく手段というのはあつたはずだし、そのへんをコストの削減のなかで整備していかなかったという意味で人災だろうというふうに思うんですよ。

国鉄時代は全国に1社制の中で一つですから、この部分についてはこれを直そうという全国的に直したわけですよ。6社に分かれて、それぞれの経営状態が違う中で、それぞれが違う安全対策も含めて、ここは大丈夫的な安易な考えの中で、走らせたというのが大きな原因ではないのかと思います。

ル⑤がずれている。

旭：労働情報でみたら、普通カーブする時は片方上げるじゃない、右を上げて左を下げるとか、そういうのはあまり関係ないのね。高等技術というか……

村井：あれくらいのカーブはどこへ行つてもあるんだよね。現実に。

旭：脱線というのは、昔何年か前東急から地下鉄にはいる、あれも大きかったけど、あの時初めて聞いたくらいで……。ああいう脱線ってあるんですかね。置き石の脱線というのは聞いたことあるけど。ああいう脱線って昔あつたんですかね。

平：ないなあ。ないよね。

旭：70キロと140キロというのはだいぶ違うけど……。ちよつとスピード出し過ぎて脱線というのはたまらないよね。

村井：車でいえばスピニングがかったような……。そうだよ。旭：脱線の理由はまだ説明されてないんだよね。

高山：まだはっきりしたものについては出てはいないんだよね。

村井：カーブと角度の関係だから。

平：そのあたりはちゃんとできていたと思うんですよ……。技術的には。

ただその後の報道の中で、あの事故を起こした車両は前から調子が悪かつたとか、運転手の仲間の間で話しが出てたとか、聞いたんですよ。そんな話があつた時に、運転手が何故現場とか含めて、そういうのができなかったのかと思うのですね。

それこそ後の祭りじゃないという感じですね。そういうことも言えない労働実態であつたのかと思うと、働いている側からすればちよつと情けないな、という感じがしますね。モノ申せないで安全も生まれるのか、と。

村井：話変わるけど、日航の飛行機が車輪がずれて……。整備が非常に不十分というか、それが点検されてないままいつちやうとか、なんかこう共通した、そういうことになつちやうてんのかなという感じ。

高山：接続の関係で直したとい

村井：中目黒の地下鉄の事故と大体同じではないの？。レール。

高山：日航の場合は海外に整備を外注化してますよね。JRの場合も上回り・下回りといって、メンテナンスを子会社に出して。昔は直営でやってたんだけど。今、電車に乗っても、車庫から出てきた電車でもネジが外れてたり、電気が消えていたり、あと、検査依頼しても直らない時張り紙貼って、ここが故障です、とかあるんですが、そういう紙が3週間とか4週間とか貼りつ放しなんです。

旭：本当？何線の話し？

平：東海道線の話しですよ。お客さんに見えるんですよ。で、そのまま走ってる。それで貫通ドア、車両と車両の間のドアが閉まらないとか。そういうこと一つみても採算性、あと自前で車両を直さない。というのが明らかだと思っんですよ。

旭：自前で車両を直すって一番根本じゃないですか。

高山：部品のストックがないんだよね？

平：東海道線も来年、一番重い電車がなくなるんですよ。鉄でできている車両が。

旭：今はアルミなんですか。鉄じゃないんだ……

平：113系という車両があつて、あれは鉄なんです。だからもう廃車にするから直さないのかな？と冗談で言ってるんですよ。けど、直さなきゃいけない部分は直してもらわないと困るんですよ。使ってるいじょうは。

そういう企業の姿勢がみえるという事は、お客さんからすれば本当に大丈夫なのか？と。思うだろうって言っても、ちゃんと報告書出して、も直らないという実態がある。

社員教育と懲罰的
労務管理

坂本：ま、今回の事故は社員教育というか、我々の内部で言えば、あらゆる職場がそうだけど、事故防止の観点から社員をどう教育するかという観点で「グループ全体がいない、懲罰的というか……」だから今回の事故でも、回復運転なんかは本来やっちゃいけないことだけやらざるを得ない、でオーバーランがあつて結局やると……何故そんなつたか原因追及して安全運転のためにどうするか、ではなく、そういうやつた人間を車掌から降ろす、運転手から降ろす、そういう恫喝的なやり方。なおかつ、社員教育が事故防止につながるようなものではなく、非常に労務管理

的な会社のいうことだけをちゃんと聞いてやっていければいいんだ、そういうのがかなり濃厚だし。東日本の場合かなりソフトになつてきたけれど西日本の場合は、あそこまでまだ露骨にやってるのかと。けれど内実的には東日本も西日本も本質的には事故防止というより懲罰的な労務管理、だから事故防止するというより、仕事していて萎縮しちゃう。そのことがさらにまた事故を重ねるといふ、そういう構造になる。

旭：で先程西日本と東日本とは違うということがクローズアツプされたということがあつたけど、実は本質的に同じだということ……、そのあたりをもうちょっと。

西田：国鉄分割民営化の過程で、それに賛成する労働組合がいろいろ、連合ができた、そつちの方は企業のパートナーとして優遇されて……。それは別に国労とか全動労とか千葉動労とか、そちらの方の組合員は本来の鉄道業務からはずされて事業部とか……、それ以前に北海道・九州を中心に清算事業団に送られて、3年後には採用されず不採用ということまで首切られるわけでしょう。

旭：一般的によく言われるのは、労働情報のパンフレットなんか読んでみると、ここでは現場力という言葉が使われているし(石沢さん)、そういういい方されてるし、別の方では、安全問題とかに対する労働モラルが民営化以降低下しているのでは、といういい方が

旭：今アルミなんですか。鉄じゃないんだ……

なつていくんですが。単純に色分けしちゃうまいでしょうが会社派の労働運動というか、JR連合がですね、そう単純でもないと思うのですが、そういう中で西日本・東海・四国・九州で旧動労系が少数派になつていく。東日本・北海道や貨物会社でJR総連が多数、そういう労働組合の組織状況になつてるんですよ。それで東日本で国労や全動労や千葉動労の組合員がやられたような攻撃を、西日本・東海、とくに西日本で旧動労系JR総連の組合員もやられてるといふ、大雑把な感じだろうと。

旭：西日本の旧動労系って何割くらい？少ないんでしょう？西日本では。

坂本：西日本では今4000人くらいじゃないかな。西日本の国労と同じくらい……。

村井：そうそう、そのくらい。旭：今度亡くなった人は連合？坂本：運転手はJR連合、車掌はJR総連。

旭：一般的によく言われるのは、労働情報のパンフレットなんか読んでみると、ここでは現場力という言葉が使われているし(石沢さん)、そういういい方されてるし、別の方では、安全問題とかに対する労働モラルが民営化以降低下しているのでは、といういい方が

旭：今アルミなんですか。鉄じゃないんだ……

れているし……。そういう要素で組合というか職場の規制力という問題になると思うんだけど。そのあたりの低下というのはどうですかね。

相模：外部の人間からすれば、鉄道で働いている者にとつて、「安全」ということ、「安全に人を輸送する」ということは仕事の上での生命線であり、同時に誇りにするようなところでもあつたと思うんですが、鉄道にとつて安全ということはその仕事にとつての柱だという感じがするんですが、そのへんがいろいろ侵されていくというのがあつて、先程の話しにもあつたように会社側はそういう安全教育ではなくて、まさに懲罰と労働者支配の労務政策としてやるというのに対して、やっぱり安全ということを大切にしたい、誇りにするといふ従来からあつた労働者の意識というものが、その拮抗で、その中でどうなつていくのか……。

組合が強い時には、現場での労働者の力が強い時にはそういうことが強く意識されるんじゃないかな、熟練の人が若い人に教えていくということも含めて。

旭：一般に意味では今の若い子は応用力がないっていうか、技術の継承が先輩達からちゃんとされてないという中で、想像ですが事故を起こした運転手は逃げ道を知らなかったっていうか、そういう感覚

旭：今アルミなんですか。鉄じゃないんだ……

旭：今アルミなんですか。鉄じゃないんだ……

の人の話が出ましたが、私たちが入ったときは(私は入つて30年目ですが)、先輩達から仕事を教わつた。それで私は構内の経験はないんですが、構内の人は危ないときには先輩達から愛の鞭と云うか石が飛んできて、アブねえじゃないかと言って殴られながら仕事を覚えたつて。私も車掌になつたときはやはり先輩達からお客の前で恥をかかされるんですけど、コノヤローと思うんですがそれが愛の鞭になつて、これをやるよと、そういうような危険があるよと、そういうようなことを教わつてきたと思つたんですね。

国鉄分割民営化の中でやはり技術の継承がなくなつたつていうか、なんかこう先輩達から教わるのではなくて会社側が一方的にしろくろくで教えてくる。だから国鉄時代は先輩達から教わつて、いいことも悪いことも教わるんですけど、これやったら危ないんだけど、本当はこうよ、やたら仕事早いんだよ。やる時は気を付けるよ、という認識も与えられるわけですよ。

そういう意味では今の若い子は応用力がないっていうか、技術の継承が先輩達からちゃんとされてないという中で、想像ですが事故を起こした運転手は逃げ道を知らなかったっていうか、そういう感覚

旭：今アルミなんですか。鉄じゃないんだ……

旭：今アルミなんですか。鉄じゃないんだ……

旭：今アルミなんですか。鉄じゃないんだ……

ベテランの喪失

高山：話しかみ合うかどうか分からないですが、今、ベテラ

を私は持つてるんです。

坂本：西日本の労働組合にも責任があると思うよね。会社側が効率化と利益第一で安全無視でやっているのに対して、我々から見ても西日本の労組はもうちよつとシャキツとした闘いとか運転保安とかそういうものをやっていたらと思うと

まあ、あれ以降の中で国労の声明が一番ダメな声明だと。確かに一般論としては言ってることに間違いはないけれど、具体的問題に関しては何も言っていない。事故防止の観点から一般的に言うのと、やっていることに對してチャンスと批判して組合としてどう取り組むのかと、東

日本の場合は国労の比率が高いことも事実だけれど、やっぱり国労の存在が東労組といえどもそういう問題に関して曖昧にできないとね。で、東労組としても旧動労が中心だからそういう問題に関してそれなりにやってきたのも事実だけれど。

西日本では労資一体となつて、運転保安・安全問題については妙に利益第一主義というか、確かに経営基盤の問題があったとしても、なにか西日本全体が現場の労働者に無知を言つて強制してきた、現場の労働者の問題提起に対して、組合側も会社側も両方して無視してきた、そういう感じがものすごく受けるよね。

平：俺が思うには、採用の仕方と試験制度の問題がある。どうしても絡めちゃうんだけれど、昔は3年勤務係で旗振りをして、今はもう人がいなくなつたのではないんですが、それなりの3年の中でいろいろの下積みの中で経験をし、そして車掌をやりたいは運転手という方向性が、1年もやらないうちに車掌になり、車掌も1年もやらないうちに運転手見習いになり、4年目にはもう運転手の1本ですよ。そういう意味では職場でのみんなとの付き合いもないうちにどんどん上がつていく。

会社がやっているのはあなたに試験さえ受ければお金がどんどん上がっていきますよ、というそういう政策の中で進められて、お金をもらうためにはそういうことをやっていかなきゃならない。まあ労働者ですから上げていくのはそれでいいんですけど、車掌が奥さんに電話した中身を聞いた時に、試験の中で今はこういうことやってられない、そこにあるのは自分の賃金を上げるために自分を守りきれないのだけど、なにも言わないで反論しないでいくことがベストみたいな、そういうような形の中で、みんなが協力してやろうというのではなく、自分さえよければいいというような労働者がいっぱい増えてきているの

かな。とくに安全を守らなきゃいけない鉄道関係の労働者もそこまでできているのかなと。で今指導していく立場が2年3年の人間が若い連中を指導していく。ベテランと言われている人間がみんな排除されているんですよ。とくに東日本の場合ですけど。だからそういうふうなシステムのなかで、やっぱりそこを改善していかないと、と思うのです。もう少しベテランを大事にした方がいいのでは。ベテランはそれなりに経験があるからいろいろなことを知っているのではと思うんですよ。

旭：そういうベテランって今、なにをされてるんですか？もう運転手させられてないんですか？

坂本：国鉄割民営化の時に、こちらがベテランと言っているような運転手はみんな北海道からきた動労に全部一掃されたんですよ。北海道からきた人間を教えた国労組合員が運転手から外されている。

そういう意味では、誰がベテランと決めるのかというと、若い連中がベテランと決めるんじゃないかと思うんだよね。だからそういう職務、いうことを聞く人がそういう仕事を若い人に教えていくシステム。そこにも原因があったんじゃないかと思うんですよ。

西田：運転手の仕事ってのは、どこでスピード何十キロ、ここで減速、スピードを落とせ等、全部決まってるはずじゃないの？そために何回も訓練して（そう1年やる、の声）—運転見習いやつてきて1本1人前になるわけだから。

だからあそこでスピード上げろということだったんじゃないかたんじやないかと思うんですよ、今回のあの事故。もちろんカーブに入る前は落とすだろうけど。

平：だからあそこのカーブは制限速度で走ってきたのは誰もいないと思うんですよ。

旭：そう言われてるよね。

高山：いや、恐らくそうだとするんですよ。

村井：ちよつとスピード出し過ぎたのは確かだけれど。

に当たって、ATSPも新しい設備も導入したし、運転時分も余裕を持ったダイヤを出してきた。前のダイヤは駅に停車して乗客の乗り降りする時間がないダイヤだったでしょう。

高山：15秒間停車だね。

平：15秒間停車・・・。

旭：今、山手線はアレ何秒間停車？

高山：30秒・ないのか？20秒？10秒単位だからね。

村井：駅によって違うし、あと時間帯によって。えーと、あれ、ABCとかいうのかね。停車時分というのが定められているんですよ。例えばラッシュ時間なら乗降時間を45秒取るけれども、中間帯駅なら30秒にする、とかいう。

ものね、鉄道労働者の。旭：でもヨーロッパは10分遅れなんか平気だというし、俺もそんな気もするし、難しいよね。

西田：朝夕の通勤時間帯は大変でしょう？15秒の停車時間だったら、止まって降りた時点でもう30秒くらいかかってしまふでしょう、人が多ければ。それにまた人が乗り込むのに1分近くかかるか・・・。それでも車掌さんは無理矢理ドアを閉めて出て行くわけだから。

高山：ただね、遅れていても停車時分が30秒だからその中で降り確認して発車させなさいなら、まだいいわけでしょう。遅れているならそれがないわけですよ。

平：発車時間も過ぎて到着したりするわけでしょう。定時運転というのはその時間に発車しなければいけないんだから。その時間に到着したら、降り降りしてる人はもうそのままに発車したいくらいの感覚だから、前と後ろの乗務員は、そんなことありえないんだけれど。

高山：イライラするんですよ。乗らないとね。

西田：朝なんか、駅の放送でたまにヒステリックにやってる人

過密ダイヤと定時運転

村井：事故後運転を再開す

でも定時運転確保は基本だもあるんだよね。

がいでしよう。あれはそれな
んですよ。

**運転手の短期育成と
ベテラン排除**

旭： 運転手って車掌からなる
んですか？一度車掌を経るわ
け？

村井： 国鉄時代は採用時
点で運転手と車掌は別で、運転手
コース、車掌コースといろいろ
あったわけよ。JRになってか
らそれは取っ払われて、採用し
た時点でそういう区別はもうな
くなって。

旭： それは悪いことじゃないで
すよね。

坂本： それは、営業でもそう
だけど、やっぱり適性なのが
あるわけだよね。今のJRのはあ
る種そういう適性を無視して
やっていくという構造があるわ
けね。中には、俺は駅の仕事が
いいから車掌にはなりたくない
い、運転手になりたくないとい
言ってもならざるを得ないとい
うか、JRになってからそれとい
う体質もあるんだよね。
旭： Sさんはどういう位置に
なるうという気持ちがあるん
ですか？

村井： ない。(笑)

国鉄時代は入社試験を受けて受
かって、学園教育があつて、現

場やらせるわけですよ。そ
こで営業サイド・駅サイドに
派遣された人間が乗務員・運
転手になっていくことって大
変なことだったんですよ。ま
ずそういう運転の職場に転勤
しなければいけない。そこで
2年半の運転職場の経験を
経ると、試験資格がなかった
わけですよ。今と違って、レ
ールとか枕木とか砂利とかを管
轄する保線区という、保線区
にいた連中はそこで保線業務
で全うするしかなかったの
ですよ。

それが今のJRと違うし、
あと国鉄からJRになって西
も東もそうなんだと思うけど、
さつさと国鉄時代の人間は辞
めて欲しいわけですよ、基本
的には。新しくJRとして発
的に。新しくJRとして発
的に。新しくJRとして発

旭： じゃ、単に人減らしと過密
化ということだけではなしに、
実は政治ということが...

平： システム的にはなりた
いと人間がいっぱいいるんだ
から、そのシステムは別に構わ
ないんだよね、ただその期間の
問題とか含めて検討しなければ
いけないことがいっぱいある
んですよ。で、東日本の例を
とると、運転手の試験やるん
ですよ、最初に学科試験やる
んですよ、最後に適性試験やる
んですよ、で適性で落とさ
れるんですよ、普通は逆です
よね。そういうふうな採用の
システム

旭： Sさんはどう
いう位置に
なるうとい
う気持ち
があるん
ですか？

旭： 一番最初は国労排除、そ
の次には勤務希薄化・空洞化、
そういうことなんですね。実
際はそうなんだ...

村井： 国鉄からJRになつて
国労がストやつても電車は止
まらないわけですよ。まあ、国
労の組織率の低下もありまし
たけどね。ただ旧動労系が一
言やると、たとえば、首都圏
の電車は完全に止まったわけ
ですよ。そこにおける会社の
規制力って殆どなかったん
ですよ、運転手職場におい
ては。だからそれを薄めて
いくためには、そこに会社の
インシアチブを確率していく
めには血の入替をせざるを
えない、と。

旭： じゃ、単に人減らしと過密
化ということだけではなしに、
実は政治ということが...

平： システム的にはなりた
いと人間がいっぱいいるんだ
から、そのシステムは別に構わ
ないんだよね、ただその期間の
問題とか含めて検討しなければ
いけないことがいっぱいある
んですよ。で、東日本の例を
とると、運転手の試験やるん
ですよ、最初に学科試験やる
んですよ、最後に適性試験やる
んですよ、で適性で落とさ
れるんですよ、普通は逆です
よね。そういうふうな採用の
システム

旭： Sさんはどう
いう位置に
なるうとい
う気持ち
があるん
ですか？

そのものが間違っているわけ
です。お前は運転手になれば上
がるんだ、みたいなそういうけ
しかけておきながらそういう
努力をやらせるわけだよね。
企業戦士になるみたいなの
。そういうところもあるん
ですよ。逆じゃないかな。

**運転手の誇りと
熟練**

旭： 普通、運転手と車掌は連
携があるんですか？コミュニ
ケーションが。仕事も含めて、
日常トータルな意味で。

高山： 敵対関係。(笑)

坂本： 悪く言えば、運転手は運
転手以外には凄く差別的ですよ。

平： そういうところではプライ
ドが高くなるんですよ。俺らは
違う、と。

坂本： 我々は乗客2千人や3千
人の命預かって仕事してんだ
。車掌で後ろで寝てドライバー
扱ってる人間だとか、駅の旗
振りだとか、そういうのとは
違うんだ。当然、賃金なんか
もそれに比べて映するのは
当たり前だと。それがいい
意味ではある種労働者の誇
りなんだけど、悪くいうと
排外主義的な、他の労働者
に対して侮蔑的な、そういう
のがあるんだよ。それを代
表しているのがJR総連、今
の運動になっていること
なんだよ。

西田： 機関車労組だよ。空
でいけば機長会？そういう意
識は組合の別なくみんなあり
ますよ。私なんか事業部に
いたときは、いろんな系統の
運転手・車掌・保線・電気・
駅等、いろんな職種の人
が集められていたから。そ
の中にやっぱり運転手か
らきたのは、「運転手はサム
ライ・士職だ」と。武士の
土がつく。「俺たちの後ろ
には何百人の乗客の命がか
かっている」というような
ことを言っていましたから
ね。

坂本： 鉄道の職場というのは、
職種によってそういうの
がいっぱいあるんだよね。同
じ駅でも出札・改札・乗客
というのがあるから、そう
いう中でも出札の金がや
つぱり一番偉いと。大
体出札で金を扱うのだと。
金を扱ってミスしない社員
がアレで、それで勤まらない
者が改札に行くんだ、ホ
ームに行くんだみたいな、
ある種誇りのものや排外
的なものがね。

ただ国鉄時代はある種の
養成というか熟練という
か、軍隊で言えば下積み
生活よね、そういうの
をいい意味で労働者の
誇りになってきたわけ
だけど、今はそういう
誇りがなくなると。
確かに今の電車は
みんな機械的なもの
が発達しているから、
お猿の電車だ
っていうけれども、
実際尼崎の件でも
あるけれども、電車
一つ止めるにしても
マニュアル通りには
止まらない、と。や
つぱり、経験の熟練
の中で、こま
でスピードア
ップしたら
精力でも
止まるんだ
よ。確かに
マニュアル
でもここで
何か何キロ
落とせば、
ここで何
キロ落と
せとある
けど、その
通りした
らガクガ
クツとき
て、乗っ
てるお客
さんにす
れば下手
な運転した
と思う
けれど、
熟練し
てくれ
ばそうい
うガクガ
クツなし
のスーツ
と止まる
けど、そ
ういうの
をって
経験だ
し。ある
いは先
輩から
こうい
う場合
はこう
だとか、
実際
オーバ
ーランに
しても
昔はわ
ざとオー
ーラン
やってみ
せて、
オーバ
ーラン
したとき
はこうい
うように
アフター
ケアする
んだよ
と。それ
が今は
オーバ
ーラン
すること
自体が
ダメだ
と。だ
から訓
練にも
ならない
。昔は
そうい
うある
種牧歌
的な、
ミスを
経験さ
せるこ
とでミ
スを防
止して
いくと
いうの
があっ
たが、
今は
もうミ
スその
ものが
いけな
いんだ
と。そ
うい
う労働
管理で
、でミ
スした
ら今
度は懲
罰的に
やると。
そ
うい
う全
体的
構造
が今
回の
尼崎
の事故
とか、
東日本
でも
そう
いう
もの
があ
る
。表に
出ない
けど
現実
には
ある。

ここ
んこと
この
事故が
続発し
て
る
けど、
本来
考え
られ
ないよ
うな
事故
が
い
っぱ
いあ
りま
す
よ。

旭： Sさんは
どうい
う位
置に
なる
うと
い
う
心
持
ち
が
あ
る
ん
だ
よ
？

村井：国鉄からJRになって大きく変わったのは、国鉄時代は一定程度熟練労働者の人海戦術に頼らざるを得ない面というのが結構あったと思うのです。保線にしろ電気にしる、保線なんかでいえば徒歩巡回して線路の脇をテクテク歩いていくだけなんですけど、そういう中で線路の状態をチェックしていくのか、あるいは電力でいえば送電・架線というんですけど、それを線路の脇を歩きながら見て歩いたといった、そういう人海戦術もあつたわけですよ。

今はそれは検測車という専用車両があつて、それを走らせることによって、その状況を機械でチェックしていく、一定の数値を満たしていればそれでオーライという、それが今のメンテナンスというか検査の形式なんです。それが国鉄時代では人海戦術である程度対応していたという、そういった部分で数字上だけではチェックできない微妙なものがあると思うんですよ。

旭：事故をおこした電車がおかしいという話しが話題になつたというのが先程ありましたよね。そういうのが数値上では出なかつたのかしれないですね。

設備の機械化の問題

平：ATSPが入つて線

路つておもしろいんですよ、運転手の立場からいくと、ATSPが作動する前にちゃんと速度を落とす。これが腕なんです。それで引つかかると思い切り止まるんですよ。グーンと急にスピードが落ちるもんで。そういう意味ではその機械が作動するか作動してないかは別にして、そういう意味でそういうところへの運転手への刺激、あるいは安全の部分についてはいいんじゃないかなとは思ふんですけど、ATSPが必ず作動してないかこれでも分からないですよ。そへんが今回の問題にもあるだろうし、

あと国土交通省がATSPを入れなさいと、でないと運転を再開させませんよという話しが出ましたよね。これは全国の全鉄道会社にたいしても出たのかな？出したんですよ。じゃあ、経営不振になつてる鉄道会社、それ全部入れられるか、という話しまで出てくるんじゃないかな。じゃ、政府がそこまで強制力をもつてやるならば、そういう企業に対しては補助金なり含めて出させて追及する発言なり政策ならそれでいいと思うんですよ。じゃ、できないとこ

はいのか、という話しになつてくるので、そのへんの問題も問題視していかなくちゃいけないんじゃないかなと思うんですよ。

坂本：まあ、竹の塚の踏切事

件もそうだよ。個人責任にしたのもそうだけど。結局機械化したり設備投資しても、その機械にマニュアル通りやってたんじゃない。実際はダメだから、結局スイッチを切っちゃうわけだよ。経験すればするほど、もうプザーが鳴る前に、スイッチ切つて人力でやると。それを事故が起ころなければものすごく融通効かしてやってくれたと、けど事故が起これば基本通りやってないじゃないかと、という問題も出てくるし、

今言ったそういう設備の問題で言えば、バリアー・車椅子の問題もそうだけど、我々の関係で鉄道業者で設備をちゃんとしたと言つたつて、車椅子の問題一つとつてみたつてどんだん需要は増えるけれども、結局最後は人力に頼つて駅の係員が車椅子を持つて歩くと。そういうことであるんならトラブルが起きているのも事実だし。

そういう意味で民間会社がいかに悪いかは別にしても、国が決めたこと、あるいは国政上これが必要なことであつても資金的裏付けがなければ、結局その矛盾は全部現場の労働者に転嫁されて、現場労働者がそれに對してどうするのがいつも被害者というか、両方から責められて、利用者から責められ、上から責められ、そういう状況なんだ。

乗客の反応

旭：日勤教育とかで今回は普通とは違つて会社へのバッシングが凄かつたじゃない。あれはまさに日本もマシかな、という気もあつたのだけど。今回の事故では乗客からの運転手へのバッシング、駅員へのバッシングが増えましたかね。それとも会社が問題だといふふうになりつつあるのか、どちらなんですか？それともやっぱり乗客からの労働者バッシングが凄いでしょ？

高山：それはやっぱりありましたよ。

旭：会社へのバッシングというのはあまりなかつたの？

坂本：会社というより、係員に對する、あと車掌とか、駅の改札だとか、直接接するところ。乗客だつて悪いんだよ。乗客が2分・3分遅れればすぐ電車が2分・3分遅れればすぐだからね。はつきり言つて。車掌に對してだつて電車が遅れるからドアを早く閉めようとするば、なんで早く閉めるんだつて形ですぐくるし、かなり第三者からつてのもくるしね。そういう意味で我々もかなり言われてますよ、西だけではなく、東もそうなのか、とかね。大体もうゴメンナサイ、ゴメンナサイですよ、労働現場は。(笑)

相模：乗客の立場で、今回の件で逆に反省するようになった。

(笑)今まではちよつと遅れればどうなつてるんだ、案内もないし・・・とイライラしてたけど、今回の件で、今はそう思つちやいけない、と反省するようになった。

坂本：ただね、定時運転というか、駅なんかでは標準時刻表なんだよね。標準時刻表で定時時刻表じゃないんだよ。駅の時刻表は。だから俺個人は5分までいくとちよつと・・・だけど、2・3分の遅れは普通だと思つてるけど、その2・3分でも許せないという雰囲気はかなりあることは事実だよ。

平：東海道上つてきて新幹線に乗り換えるのに、定時で着いても3分か4分かしかない電車で遅れるわけですよ。2分くらい。間に合わないじゃないかよ、つてこうなるわけですよ。いや、これには参っちゃうよ。そこで、もう少し早い電車できていただけませんか、と。そういう意味では、自分は知ってるから乗り換えられると思うんだよね、4分間くらいでも。でもそこで2分遅れたからつて言われたらもう万歳ですよ。

高山：そういう意味では日本人つてそういうキチキチ、鉄道は時間通り動くもんだみたいな。思いこんでるんだよ。その件にやっぱり利用する人も考え直さなきゃいけないよね。余裕を

もつて利用しましよつて。(笑)

坂本：実際駅なんかで電車遅れると、2・3分でも遅延証明もらいにくるからね。10分以上も遅れるとそうだろうけど、2・3分の遅れでさうだと、あんたはそんなに会社に對して信用がないかと言いたくなるほど、遅れにたいしては異常だよ。

平：都会の人間の方がダメ。地方に行くとも10分くらい遅れていても地元の人にはなにも言わないですよ。旅行に来てる人が騒ぐんですよ。だからそういうふうな、環境がそうなのかノンビリしたもんだよ。地方に行くよ。

高山：国交省は都市鉄道事業増進というキャンペーンやってますでしょう。いかに乗り換え時間を少なくさせるかという。国がそういうような政策やつてるからもうダメなんです。

社会のトヨタ化と安全の犠牲

坂本：社会全体がもうトヨタ方式なんです。トヨタ方式で動いてるからもういかに効率よくするかという。だから少しでもズレるともうバッシングが始まるんだよ。

相模：乗客の立場で、今回の件で逆に反省するようになった。

西田：車両故障した、電車止まっちゃったけど、検修の社員が到着しても、それこそ今の車両はブラックボックス化されているから、直せない、故障が多い。換えの部品が到着するのに時間がかかるわ、なかつたりするわみたいな、トヨタのカンバン方式ってそういうものじゃない。

旭：カンバン方式って在庫貼減らしたからそういうことあるなあ……

西田：公道を駐車場代わりにしてトラック待たせてるんでしょ。工場までの公道やら国道を。そういう身勝手なことやっていて、世界に冠たる大トヨタになつてるわけでしょう。それを真似てるわけだから、当然それが素晴らしいとされているモデルなんだから。

坂本：全体としてそういう人災的事故の方が多くて、結局保守部門が合理化されて人がいないと、だから点検もやらないと。一度そういう事故が起ると、その事故を回復するため人に人がいないから、2結局時間、3時間は電車が止まること常態化してくる。

尼崎の事故があつた後も、横浜の信号トラブルで東海道が4時間止まるとか、あるいは西船橋で2時間止まるとか、あるいは青梅線の東中神の駅でブレーキが掛かり放しになつていて2

時間止まるとかね、そういう昔だったらもうすぐ回復するものがね、そういう事故に対しての熟練もないし、そういう機械化された関係で機械に對する知識もないし、結局専門家を呼ぶまで動きがとれない。

そういう人災も含めて、前なら30分くらいで回復するものでも、2時間、3時間がざらだみたいなあ……。そういう面ではこれは西も東もJR全体が効率化の名の下に、人減らし合理化をやつて、で結局メンテナンスも全部外注化していつて、一度事故が起こるともう取り返しつかない事故になつて、そういう意味では日航と同じような構造がJRの中にも生み出されてつある、そういう状態だね。

旭：労働情報に載つてる7月25日の国労の声明つてあまりパツとしないんだけど、あれ以後声明なんか出てないんですか？もうちょっとまじな声明つて出てないの？これ全然批判してないじゃ、会社を。

坂本：先程も言つたけど、西日本の国労つてのは旭：あ、この声明は西日本ののか……

坂本：西日本はどちらかと

いうと共産党系が強くて、ある種こう、ある面では政治的には発言するけれども、労資協調というかそういう要素がある……共産党つてそういうところあるから、そういう面では会社といつしよになつて企業業績上げようみたいながあつて。我々も西日本の共産党に、お前、何やつてんだみたいな苦言はしたんだけど……

安全確保より事故の補償が安上がり？！

旭：坂本さんからよく聞いているのは、アウトソーシングで、安上がりで、これの方が事故起こつても結果的には安くなるんだというようなこと言われていて聞いているんだけど

坂本：それは前にも東日本の中で、団体交渉の中で言つていたことで、例えば駅員の要員を配置しろと、要員配置すると大体1人頭の人員費が年収5〜600万円になると。それでホームに1人置くというところは3人置かなくちゃならないのね。そうすると、人件費とか福利厚生費とかいろいろ考えたらね、1人頭、大体年間1000万あたりかかる。3人で3000万だから。そうすると事故起こつた場合に補償問題から言えば、まあ裁判やつて負けつたつて……、とそういう話は公然となされてね、異常時に備えて人を置くよりは安上がりだと会社は公然

旭：東は国労があつたりして

と言つてはばからないですよ。異常時が月にまたは年間何回あるんだと。われわれがそれに異常時にはこういう要員でないと対応できないからと言つて、異常時が月に何回あるんだ、そのために人を配置するなんて企業としてはとんでもない。そういうことは今のJRでは東、西に限らず全部、民営化以降当たり前前の常識に……。保守がもうアウトソーシングしてらつて？

西田：メンテナンスだね。

坂本：今、東で言えば、極端化しない方すれば、乗務員以外はもうみんな下請け化しよう

と。乗務員でも車掌は国労が強いから、車掌も今度は運転手と車掌に分けないで運輸双務双方にしちゃつて、行きは運転手、帰りは車掌みたい形にして……。そういうのを東日本

の場合はJR総連は自分たちが生き残るために、そういうことを会社側と一体となつて画策してらつていう状況で、駅関係も全部いずれば営業関係も全体とまでいなくても全体に近い形で保守関係も含めて殆ど外注化していくという状況。それを最も露骨に、現段階で東の場合

旭：東は国労があつたりして

抑えてるんだ……。成果が上がつてるんだ存在していることの成果が。

坂本：西の場合は実態がよく分らないけど、やむを得んということかもしれないけど、経営基盤も悪いということ、西の場合はほぼ労資一体となつて進めた結果としね、運輸保安とか安全問題とかそういう問題に関して、抵抗できなかったの

かもしらんけども、東の場合はそれを巧妙にやろうとしてる。それをJR総連も一体となつて進めるといふ構造。われわれ車掌区すらもね、

国労の中で車掌区が一番国労が力もつてるからね、(車掌区の中で2割から3割、それすらも根絶やしにしようというのが会社側とJR総連東労組とが利害一致して、運輸双務双方によつて国労を排除しよう。そういう構造があまりまして。駅員計画も殆ど駅社員がいなくなつて、いわゆる電機員コーナーになるという構造だから。要するに、指定券も乗車券も全部機械で買えるという。そこではこれまで駅の窓口で切符を売つた者を案内人に1人つけて、その機械で買つて下さいと、そういうことを放送して……。今国労組合員は駅と車掌区に多いわけだけど、そこを根絶やしにしちゃうということなんだ。

東も西も、西は労資一体で進

めているし、東はJR総連東労組が会社側の尻を叩いてやつちやおうつてやつたから、東の方がもつと反動的なところある。労働組合がそこまでやるかつていう……

旭：西日本はオーソドックスに組合がダメだということに客観的になつてるけど、東日本はそうでもないんだな、ものすごく複雑なんだな。

坂本：西の方がやり方としてはある種旧来の労資協動的な、労資一体的なね、労働者に対してある種の抑圧的な体制でやつてきてるけど、東の方は一見民主的だけど裏に回つたらいろいろ党派の利害も絡んで、非常に露骨にやつてるというかさ。まあ、東の方は、管理者を擁護するわけではないが、管理者も東労組に逆らつたら生きていけないという世界だから。

まあ、東の方はわれわれ国労がなんとか多少は頑張つてるからなんとかしていかなくないけど、だんだん高齢化しちゃつて……。ピンチな状況になりつつあるのは事実だね。

相模：今度の事故で、職場の全体としての受け止め方とか雰囲気とか、それはどうなの？一般の労働者も含めて。

高山：安全問題は別にして、端的に言つて(事故が)東じゃ

なくてよかった、という...

村井： 西は労務管理が酷いんだ、東日本はいい会社だ、で拳げ句の果てにはポータス

高山： JR、国鉄ってそんなんだよね。自分たちの職場と

坂本： ただあの尼崎の事故が起こった時は内部の人間は殆ど情報ないんですよ。だから内部の人間は一斉放送というのがあるんだけど、でも事故の概要というのはいわいわけ。要するに踏切事故があつたかそういうことしか言わないから、そうなる

我々はテレビを見て事故の概要を知ると。だから内部的には事故の概要であるとか殆どないから、後にいろいろ叩かれるけれど全然悪意ないわけですよ。だ

ただ実際にいこうと、マスコミも悪のりしすぎたと思つよ。実際、まあ傲慢な言い方すれば直接事故に関係なく前々から計画していたことだから、多少気に障るけどなんでそこまで叩かれなくちゃいけないのか、と。普通の会社でもそうだけど、規模が小さいとこはすぐ対応できるけど、規模が大きいとこはね、一斉にそれをということにはならないと俺は思うね。自肅するのはそれは当然としてもね。なん

旭： 日勤パッシングとポリーニングパッシングと両方だからな。日勤パッシングだけならいいんだけどな。

焦点のスリカエ

相模： 後半から変わったんだよ、明らかに。明らかに最初の頃は日勤教育の問題とか民営化以降の問題だとかなんとかいって、そういう会社の利益第一主義がどうだとかで、そういうこ

とから逆にじゃあ郵政民営化ってなんなんだ、という話しまでいきかけたんだよ。それがあのへんからガーンと変わったんだよ。

坂本： 当日の夜、たつけ、あの事故が起こった時に、日本テレビに学者が出てきて、これは分割民営化の必然的な結果だつて言つたら、その人はそれで以降テレビから外されちゃった。

旭： そうなんだ...。なかなかいいこと言つてるやつがいるなと思つたんだよ。でもあれは結構論調を決めたよな、最初ね。

平： でも、もう二度と出てこなかった。そういう発言をする人はマスコミもいらないわけですよ。

坂本： 事故防止だとかそういうことではなく、なにか話題がすり替えられたという...。あるいは会社の労務政策の酷さということが、なにかこうその後の社員がい

ろんな行事をやつたことが主要な問題のごとくに全部置き換えられちゃった。

旭： 私は知らなかったけど、そうだったんだ...。日本階級闘争はまだまだ厳しいですね。大

平： 同じ電車に乗り合わせた2人の運転手がどうこうつてあつたでしょう。救助活動しないで出勤したというんで...

旭： でもあれ出勤しなかつたか逆

村井： 東でもそうだよ。例えば僕ら乗つていて自分の職場でやつた場合には駆けつけるとい

うんでしようが、それ以外なら、迂回経路があるんならばさつさと迂回経路を使つて出勤しなさいよというのが、東でも指示はそ

うですよ。でも、もう二度と出てこなかった。そういう発言をする人はマスコミもいらないわけですよ。

坂本： だから我々は、そういう事故に遭遇したらまず出勤途上であれば自分の勤務先にまず電話して、指示を仰ぐようにして

というだけで、ただ後からみたらあんな事故起こつて言

い分あつても、そういう状況で間違つたことしてるわけではない。

相模： 普通は事故の影響をできるだけ広げないようにして、小さくして、他に混乱がならないようにして、他のために他のところ

旭： それも悪いような

論調になつて居るけれども、それはやっぱし当時の事故状況からすれば、そういうことはやむを得なかつた。あそこで職場に報告も

しなくて救助やつてれば悲惨な扱いになつて、逆に言えば処分の対象にもなるし、連絡して上司が

相模： 大体全部出たところで、最後にみなさんから一言ずつ。

平： 二度とやっぱりこういう事故を起こしてはならないと思つて居るので、まあ、職場でや

れることをやつていくしかないのかな、と。やっぱりあまりにも悲惨すぎますよね。こういう事故

はあつてはならないし、起こしてはならないということだけは、自分で肝に銘じてやつていきたいと思ひます。

坂本： あとは、乗務員とか運転手は昔から労務は運転保

安確立に向けて安全問題に取り組んできたのだけれど、やっぱりJRになつてから少数派になつたという関係もあるし、会社側の攻撃も厳しいんで、きつとそのへんの闘いがかなり機関としても萎縮しているし、われわれ自身も

務員とか運転手の場合は、希望をもつてやつていくためにもやるしかないからね運転保安の闘いは、やっぱり再構築するくらいの気持ちでね。

旭： そうだよな。さつきの話のように、駅員減らして、裁判の費用とどつちが得かと天秤にかけられたらかなわな

坂本： 結局係員が全部尻ぬぐいさせられてるんだよね。会社側も通常は運用でやらせていて事故が起こると完全に責任転嫁し、何故基本通りやらなかつたつて、これ会社の

相模： 昔からの労災事故はみんなそうだから。普段はこういうふうにしておいて、

実際事故が起こると基本動作守らなかつたからだ、自己責任だ。

平： 言つた通りやつてない、と。

坂本： でも言つた通りやつてると、職場なんかまわんないこと、会社だつて分かつてるのね。一回事故起こるとそこだけ追及してくるからね。

会社側の、事故の後追いの対策

村井： 個人的見解なんです。JR発足のあと東日本で東中野で追突事故やってるんですよ。その時の社長が言った言葉の中に、結果的に事故があつてよかつたと思える事故防止策を作つていこうと。本音出たと思ふんですよ。というのは国鉄時代から常に近代化というシステムを進歩というのは、事故があつたことによつてその改善策として後追的に運転保安設備が改良されてきたという経緯があるわけですよ。その体質でのが相も変わらず変わつてないが故に、こゝういつたことが起きたのではないかと。西日本だつてあの事故がなかつたらATSPの導入はもつと遅れたわけじゃん。

坂本： それは全体的に言える。現場でいくら問題を指摘してもね、会社側は改めないの。だけど、事故が起こるとサツと直るといふさ、それは昔から変わらないよな。事故が起きないと直さないと。い。

村井： だから基本的に事故を想定しないわけですよ。例えば要員配置の問題だつて、そういうことは年に何回あるんですか、と。だつたら金かけてた方がいいと、発生したことに對してね。そういう発想では東でも根強くもつてるわけですから。

西田： 別にJRになつたからというわけではなくて、国鉄時代末期からはこういう傾向が出てきていて。かけ声だけの安全、実際は効率化、金儲け、それが企業の本質的な論理なんだろうけど、本性なんだろうけど。

あの当時だつて、さつきも言いました。血の入れ替えでオーパーンなんて日常茶飯事だつて言いましたけど、あの当時危険性は一部、マスコミ・ミニコミ含めて警鐘鳴らす部分はあつたけど、労働組合は言つてたんだらうけど、今回ほどに例えば連日のようにテレビで、例えば日勤教育の不当性だとか、おかしいんじゃないかと、安全第一義だとかというふうな報道がなされたのは、これまでないなあと。比較からいってね。

ところがそれがなにか大惨事で人命が奪われたいとそうならないのかという、そのへんがとでも残念で、だから要員をここに何名置いておくよりも異常時で裁判で賠償金払うほうが安上がりだと、そのような発想をする国鉄—国鉄時代からそういう発想だからJRという鉄道会社の発想をね。今回も事故がないと改めない。事故がなくても改めさせる労働運動を、そのことを肝に銘じて。

旭： 日勤教育の暴露つて凄かつたんだけど、あれは事故が

起きたからなんだよな。事故がなくあれがあると素晴らしいんだよな。

坂本： 日勤教育つて他の労働組合だつて国労はほぼやられてきたんだよな。われわれだつてN君はほぼ16年間鉄道勤務を外されてるし、俺だつて4年しか働いてないし、金なんか賃カツ入れられてるし、そういう面で国労組合員で今現場で闘つていられる部分みんな大抵日勤教育的なもの全部いやしてきたという、そういう状況ですよ。

安全問題と 職場闘争

高山： 107人だからというのとじゃなく、1人でもこういうこと起こしちゃいけないんだということ。それで、この間うちの車掌区でもう一回この時期でもう一度安全点検しようという分会で指令出してます。

旭： 素晴らしい。

高山： 慣れで戻つてこないんですよ。やはりこういうことを見てても戻つてこないという危機感を感じた。やはり私たちが乗つてある駅では全然見えない中でドアを閉めなきゃいけない、というふうな分割民営化後6、7年くらいまでは毎年毎年団体交渉の中で上げて、蹴られても上げていたんですけれども、ややそれが常態

化してきてこの5、6年しよ

うがないなって諦めるようになってる状況を反省して、107人じゃなくて1人でもこういうことがあつちやいけないんだという決意でね、もう1回分会の中でも。

平： 日報闘争やればいいんだ。

旭： 日報？

平： 報告書。報告書出すんですよ。団交でも取り上げられない、点呼でも取り上げられない、じゃあ紙面で残すしかないから、ね、今日こういう問題あるとか、もう日報闘争やるしかない。まずとりあえず、俺はもう昨日書いたけど、みっちり。だからもうそういうことしかないのかなあ

と。

坂本： だから安全問題とかもそうだけどにかく職場問題は常に言い続けるしかないんだよ。言い続けることが会社にとって圧力になつてそれがあつた時ポツと解決するとか。あるいはやつてるうちに事故が起こつたら、それで言つた通りじゃないか、とね。そういう職場の権利闘争というか、職場闘争を組織するとう、そのへんが国労最近弱くなつていからね。

高山： 持続性というのは非

常に難しいんですよ。

平： とりあえずみんなに意識を持たせる。

旭： 日報つて要するに業務報でしよう？ということは他の組合員も読むということですよ。他の系列の組合員も。

平： 読まないですけど。ちゃんと取つておくから。現場長では処分できない。で全部束ねてあるんで。回答があるものもないのもあるんだけど。

坂本： おもに新採用あたりには教育、違つた意味で教育しながらね。なんか組合教育としてやつたらいい。

相模： 最後に、乗客の立場として。(笑)今聞いた話しはほんといろんな現場でまた形変えてあるかな、交通と違うところでも随所にしょつちゅうあるかな、という感じがして。実際、先程のベテランの話して技術が継承されないというの、日本経済全体がリストラリストラで逆に人材不足になつていくというか、それで日本の技術力が落ちちゃうというふうなことが言われている。

とにかく今回の事故については乗客の立場としては、こ

遺伝子組み換え

作物反対!

本根 輝雄

■巷にあふれる 遺伝子組み換え食品

スーパーに入るとずらっと並んだ食用油やマヨネーズ、はたまたまたスナック菓子などいつも見慣れた風景である。美しい梱包と華やかな宣伝文句の中でどれ程の人がこれらの食品類に遺伝子組み換え食品が使われていることを意識するだろうか？

日本の食生活の中に占める遺伝子組み換え食品の比率は大豆・菜種で四八％、トウモロコシでは二二％という数字になる。いずれも表示義務のない油製品などに使われる物が多いのである。

■遺伝子組み換え食品の 安全性は？

政府や遺伝子組み換え(GM)推進企業は「遺伝子組み換え食品は科学的に安全性が確認されている」と繰り返し主張しているが、その論拠は全く信頼できる

ものではない。というのもその根拠に実質的同等性と言う概念が入っているからである。

遺伝子組み換え食品を従来の非組み換え食品と全く別の食品と規定し、新しい品種の食品として安全性を評価することになると、厳しい評価基準を設定せざるを得なくなってしまう。それを避けるために持ち出されてきたのがOECDが打ち出した「実質的同一性」という原則である。たとえば遺伝子組み換え大豆が通常の大豆と実質的に同じであると見なされれば、特に厳しい評価はしなくて良いと言うもので、作物のほとんどの部分が同じであると見なされるために安全性評価の対象外になり、新しく付け加わったところだけを評価すれば良いと言うことになるのだ。その結果基本的には導入する遺伝子とその産物だけの評価でよく、組み換え食品自体の安全性は全くチェックしな

いでよい事になってしまったのだ。

具体的に言うと、問題点は①組み換え作物本体の毒性審査が免除されている事(※一)②組み込まれたタンパク質の審査も不十分で、慢性毒性や遺伝毒性などの長期的な安全性試験が行われていない(※二)事。③客観的な資料に基づく審査が行われていない(※三)事である。

※一：遺伝子組み換え技術による危険性は予期せぬ被害にある。それをチェックするには遺伝子組み換えが行われた作物自体を長期にわたって動物に摂取させる毒性試験が必要ならずであるが、現在の安全審査はその根本的な審査が免除されており、審査されるのは組み換え作物本体ではなく、組み込まれる遺伝子が作り出すタンパク質のみなのである。

※二：組み込まれたタンパク質の安全性試験の内容は、ア、マウスの口に直接タンパク質を詰

め込む強制急性経口試験 イ、人工合成した胃液と腸液に類似した物質にタンパク質を入れて分解が早いかな否かを見る試験 ウ、従来からアレルゲンと分かっているタンパク質と構造が異なるかどうかの評価の以上三点のみである。

※三：安全性の審査の基礎となる試験や検査はすべて申請者、つまり遺伝子組み換え作物開発者ないし販売者が作成した資料に基づいて行われている。要するに「それを売って儲けたい企業が大丈夫と言っているから大丈夫だ」という論理。厚生労働省は企業の提出した資料の書類審査をするのみと言ってよく、確認のために追試験は全く行っていないのだ。

■諸悪の根源WTO

一九九五年一月一日にウルグアイ・ラウンドでの合意に基づき「関税および貿易に関する一般協定」(GATT)の一部として発足したWTOは現在では世界で一四八カ国の加入を迎えている。WTOは推進派によって描かれたバラ色の世界とは一八〇度違った現実をこの一〇年間に表してきたが、それはウルグアイ・ラウンド交渉のころから環境保護団体や労働団体、消費者団体が主張してきた危惧を現実のものとした年月であった。健康・安全問題、環境保護、基本的

人権、労働権、こうした労働者にとって不可欠の問題は「公正な貿易」というお題目の下、WTO成立以降あらゆる局面で後退を余儀なくされてきた。

一九九六年フランスは発ガン性のあるアスベストの全面的な禁止をEU八カ国とともに決定した、これに対し世界第二の輸出国であるカナダはWTOの「貿易の技術的障害に関する協定」(TBT協定)に違反するとして一九九八年にWTOに提訴した。一九九九年にはヨーロッパ全域にわたるアスベスト禁止についてもEUにWTO提訴をちらつかせて脅しをかけたのである。

一九八八年にビルマで政権を樹立した軍事政権は重大な人権侵害と民主主義の抑圧を行っているが、これに対し二〇あまりのアメリカの自治体やマサチューセッツ州はビルマで事業を行っている企業との調達契約を打ち切った。いわゆる選択的調達法である。これに対し、日本やEUはWTOに提訴している。

一九九六年WTOシンガポール閣僚会議は「我々は、保護主義的目的のための労働基準の使用を拒否し、各国、特に低賃金の開発途上国の比較優位を決して問題にすべきではないことに同意する。」と宣言したが、これは労働立法に対する挑戦状といつてもいい代物であった。

一九八八年来EUは合成ホルモン類で処理された牛肉販売を禁止し、国内および輸入牛肉の双方に対して差別なく禁止している。

一九九六年このEUの処置に対し、アメリカはWTOに異議申し立てを行った。一九九八年WTO小委員会は合成ホルモン禁止が部分的にSPS規制下での違法な処置であると判定し、WTO上級委員会は小委員会を支持。EUに対し一九九九年五月一三日までにアメリカの合成ホルモン牛肉の輸入を開始するよう命令した。

WTOは成立して以来、提訴があり検討してきたどの環境政策も、健康や安全政策も、「違法な貿易障壁で、排除または変更しなければならぬ」と採決してきた。アメリカや欧州、はたまた日本においても民衆の強制によって各国政府が嫌々ながら制定してきた健康や環境保護関連の法律でWTOに提訴され、あるいは提訴するぞと脅しをかけられなかつたものを探そうとしたら努力が必要だろう。

世界中でもっともおぞましい資本主義の恥部を集めさせた物がWTO体制と言っているだろうか。そこでは多国企業業の利益のために、公開の場での責任を問われない官僚達が「公正な世界貿易」という名の下に、世界中の民衆の利益を踏みにじっている。

■奪われる農民の権利

カナダ・サスカチュワン州の農家・パーシー・シユマイザー氏は一九九八年モンサント社(※四)によって突然提訴された。モンサント社の開発した除草剤耐性の遺伝子組換え菜種をライセンス無しで作付けしているとの理由である。

シユマイザー氏自身は全く身に覚えが無い事で、五〇年間の努力で培い開発してきた純粋な種子が近隣の圃場で栽培されているGM作物によって汚染された被害者であるにもかかわらずである。

連邦裁判所での第一審判決はモンサント社の勝訴であった。そしてこの判決の中でもっとも重要な点は「組換え遺伝子が、非組換え種なり大豆なりにどのような経緯で混入したかは問題にならない」としている点である。花粉が飛んできて自然交配する、種子が鳥や小動物やミツバチによって運ばれ混入したとしても、混入が起こった場合、その農家の持っている種子・収穫物はすべてモンサント社の所有物になってしまうと言うことなのである。

WTO体制下(TRIPS (知的所有権)協定)この判決結果は日本にも同様に適用される。一端、汚染されてしまえば農家は自由に作物を作る事が出

来なくなり、モンサント社の言うなりにならざるを得なくなるのである。(シユマイザー氏の裁判は最高裁にもちこまれ判決は二〇〇四年五月一二日に下された。その判決では遺伝子汚染に關する判断は避け、特許権侵害だけで判決が下され、モンサント社の特許権を侵害したとする判断は一・二審を支持。しかし、実質的に利益を得なかつたことから特許権侵害にともなう賠償支払いはない。というものであった。つまるところ、最終審でも農民の権利よりも巨大農業企業の特許の方が重視された)

TRIPS協定二七条三項(b)の下でWTO加盟国は種子を含む多様な植物に対する農業企業の特許保護を義務づけられる。この条文は種子蓄蔵の所有権と支配を農民から奪い取り、巨大な農業・種子企業が農民を支配する構造を確立するのである。

本来ならば連綿と連なる農村共同体や諸個人における品種改良の結果として今日の農作物が存在するにもかかわらず、一端企業による特許権が認められるや否や、農民の権利は奪われ、農奴制における農奴のごとき支配を一握りの巨大農業・種子企業から受けることになるのである。

GATT下においては貿易上の紛争は協調と交渉による解決に力点が置かれていたために、提訴された側の国は時によって

は裁定を無視することも出来た。これに対しWTOの小委員会には貿易制裁措置の裏付けのある判断が示せる仕組みとなつている。そのためWTO体制になって後提訴する資金力のない、さらにはWTOの保護を享受するコストを支払う能力のない途上国が先進国によるWTO提訴の脅しの後、国内法の改正を強いられる傾向が著しくなつてきているのである。

豊富な遺伝子資源を持つ途上国はTRIPS協定によつてかえつて困難な局面に立たされていく。先進国の企業が植物の特許権を取得するためには、その品種に改変を加えたと主張するだけで良い。さらにその改変は品種を意味のある仕方に変えなくとも良いのである。特許審査官は主張されている「新種」を検査する制度を利用できないので、

往々にして特許権を認めてしまふ。特許権が無効かどうかは民事訴訟で争うしか無く、膨大な費用のかかるこれらの訴訟は途上国の住民の共同体には不可能である。

TRIPS協定がひとたび実施段階に入ればWTO加盟の途上国は種子企業の特許権を強制する義務を負い、「不法」な穀物を引き抜くか、零細な農民達から使用量を徴収しなければならぬ。そうした

ければWTOの制裁を加えられるからである。

※四：米国の化学薬品企業・ベトナム戦争時に使われたエージェント・オレンジ(高濃度のダイオキシンを含有し悲劇的な健康被害をもたらした)という除草剤の製造企業として名高い。世界第二位の農業メーカーかつ世界有数の種子メーカー

GM植物は植えたら お終い

農水省によると遺伝子組み換え作物の非組み換え作物との交雑防止距離は大豆で一〇m、菜種・トウモロコシで六〇〇m、

稲で二六mだそうである。あたかも一定の距離を置けば交雑が起きないかのような議論が専門家やお上の声として流されているが、現実には遺伝子組み換え作物の封じ込めなどでは出来ない。風を止めることは出来ないし、自然交配は止めることが出来ない、種子や花粉は風に飛ばされるし、花粉をつけた虫や、

種子をつけた鳥、動物が移動することを止める手段はない。そうした昆虫や鳥が自動車や鉄道に乗って移動することを防ぐことも出来ないのである。

さらにGM作物の遺伝子は優性遺伝子である為、非GMの作物と交配した場合、作物はすべ

てGM作物になってしまう。GM作物と非GM作物の共存はあり得ないのがある。

しかも、交配は菜種なら菜種だけというお行儀の良い具合には行かない。菜種はアブラナ科の植物であり、アブラナ科には大根とかカブ、カリフラワーなどの近縁種が多い。自然交配によつて現実にはこうした野菜畑などにもGM汚染は進んでいる。

同一の地域にGM栽培農家と慣行農業、有機農業の農家が共存するということはあり得ないのである。否応なしにGM農家とならざるを得なくなるのが現実である。

さらにGM作物自身がスーパー雑草化する事態も発生する。たとえば小麦栽培用の畑に菜種が繁茂したらそれは雑草以外の何者でもない。しかも、これらの菜種が除草剤の効かないGM作物であるとしたら、それは人間の手で抜く以外排除しようのないスーパー雑草である。しかも除草剤耐性組み換え遺伝子の水平移動に伴い新しい種類の雑草が生長してきているのである。

確かに最初の一年はモンサント等農業企業のように農薬の使用量を減少させることが出来るかも知れない。しかしあくまでも最初の内である。アメリカの圃場四〇力所での調査結果はメーカーの宣伝とは裏腹に収量においてラウンドアップレディ

大豆は五、三%減少したことを明らかにした。農薬使用量については中西部において農家は使用量を三倍〜二倍に増やさざるを得なくなった。カナダでは三種類の異なる除草剤耐性菜種を植えた畑からすべての除草剤に耐性を持つ「スーパーウィード」が出現している。かつての化学農薬による被害は「沈黙の春」としてレイチエル・カーソンに表現されたが、あくまでも人間が使うのをやめれば被害の拡大はあり得なかつた。

しかし、今度の相手は自己増殖し、かつ自分の毒素を周りの作物に伝搬することの出来る生き物なのである。まさに植えたらお終いなのである。

(了)

労組も植民地主義が

流行なのか？

……天下に恥をさらす石川島播磨重工

労組のニュースを糾弾する！

大杉 仁一郎

植民地主義万歳！？
これって労働組合なのか？

2005年の春、私は知人から石川播磨重工労働組合連合会（以下石播労組と略記）で最近だされた労組ニュースをもらいました。あまりに露骨に朝鮮半島への植民地支配を正当化する内容でびっくりしました。タイトルは「労連の主張」日本人であることを誇りに思う「日韓の歴史」

内容の骨子としては「日清、日露戦争はアジアに進出してきた西歐列強からアジアを守るための正しい戦争だ」「朝鮮併合は日本との併合を望む声があり、それに応えたもの。西歐列強から守るための行為」

税者の金で朝鮮半島で治水、教育、医療、鉄道、道路など様々な社会的基盤整理をした。」

といった主張の後で、「自分の不利なことは全部人のせいにして、自己の反省が全くないことが日本と韓国の大きな違いでしょう」と最近の反日の声を批判しています。新しい教科書をつくる会の主張をそのまま真似たような妄言がつづく文章です。しかもこれが労働組合の主張として出された事に唖然とします。

この文章では日清戦争は在留邦人の保護のため、日露戦争はロシアが脅威となってきたからと全て戦争の原因を他人のせいにして正当化しています。この文章で石播労組が記述しているように日本領の遼東半島（これは本来中国のものだった領土を奪ったもの）をロシアが奪ったから奪い返すために戦争

を起こしたということは、日露戦争は中国を植民地支配するために日露が争った戦いであったことを示しています。西歐諸国のように富を収奪するための侵略ではないといいますが、力づくに領土を奪い合い支配しようとする姿勢を歴史的に植民地主義と呼ぶのです。石播労組は「自分の不利なことは全部人のせいにして、自己の反省が全くないことが日本と韓国の大きな違いといえるでしょう」と述べています。それはまさに石播労組の態度そのものです。

さらに許せないのは「弱体を露呈した清国」「中国が自国の領土保全もままならぬ老廃国」「朝鮮はその属国に過ぎなかつた」と隣国である中国や朝鮮を貶めるような文章が続いている事です。戦前の日本はアジア諸国を侮蔑し日本がアジアの盟主だとして戦争を繰り広げてきま

したが石播労組の認識はまさにこの当時の野蛮な植民地主義と同じです。こうした認識ではアジア諸国と信頼関係を築く事は出来ないでしょう。

「朝鮮併合は日本との併合を望む声があり、それに応えたものだ。それは西歐列強から守るための行為だ」という主張は1919年3月1日に述べた数百万人の人々が朝鮮半島独立を叫び参加したとされる3・1独立運動が起ったことを無視するもので、まさに歴史を知らないという無知をさらけ出した内容といえます。もし、かつて朝鮮半島が置かれた立場に日本が置かれて、日本が「お前は一人で自立できないから植民地支配してやるぞ」といわれた時に、はいそうですと答えられるでしょうか？相手の立場に自分を置き換える想像力が欠如した、まさに一人よがりな考え方だと思いま

又、石播労組は「日本の納税者の金で朝鮮半島では治水、教育、医療、鉄道、道路など様々な社会的基盤整理をした。国からの独立を助け、ロシアの南下を食い止めるため、日本人の血が流されました。」などと主張していますが、鉄道網も日本が朝鮮半島を支配するための都合でつくられたものです。戦前、日本は米の完全自給が出来ずに朝鮮半島で米をつくらせて、日本に大量に輸入していったため、朝鮮半島での米が少なくなり、一人当たりの消費量が下がっていたという歴史があります。この当時、米を運ぶのに鉄道が活用されていたはずですが、日本はまさに朝鮮を搾取し飢餓の危機に陥れていったのです。さらに日中戦争、太平洋戦争と戦線が拡大する中、兵士が不足しました。そこで朝鮮半島から朝鮮人を兵士として動員して行きました。

闘いの日々を送ってきた石さんがもし生きていたら、この妄言にきつと怒りを覚えたに違いありません。私には石播労組の発言は決して許せないと思ひ、要請文を提出しました。それ以来数ヶ月が経過しましたが、また石播労組からは何らの回答も来ておりません。完全に無視されているようです。

しかしそもそも、この石川島播磨重工の労組がなぜこうした発言をしたのでしょうか？それは過去と現代を貫いて存在する植民地主義の問題が背景になったと言えます。この短い文章の中でその意味を考えてみたいと思います。

「死の商人？」 石川島播磨重工では違法行為がいつばい？

この石川島播磨重工（以下石播と略記）はいわゆる軍需産業です。自衛艦など様々な兵器を防衛庁に納めており、元々の企業体質として右寄りの体質を持っていました。軍需産業は競争がビジネスチャンスという皮肉な性質を持っています。後述するように最近ではイラクやアフガニスタンでの米軍の戦争に自衛隊が実質的に参戦しています。こうしたときな臭い時代はまさに石播にとってはおびる歓迎すべき事態なのです。しかし現在のように「死の商人」的な軍

需産業になることには労働者が
ら多くの反発が当初ありまし
た。元々石播では軍需生産反対
の声をあげていた人々がいまし
た。かつて全造船という組合が
あり、軍需生産反対の立場でし
たが、現在の石播労組は軍需生
産にも賛成という立場から会社
側と一体化した路線を追求し、
全造船に対抗し、多数派に転じ
ました。

しかし石播労組の中では共産
党系の人々があり、彼らは内部
で戦争及び軍需生産に反対とい
う声をあげて闘っていました。
それを会社側は心良く思わず、
そうした人々の弾圧に乗り出し
ました。

会社側はゼロコミユニストを
もじったZC作戦というものを
展開しました。思想的に共産党
に近いと思われる人を含めて広
範な人々をブラックリストに載
せ、職場行事から排除してしま
した。飲み会などいっさいの行
事からは排除し、いわゆる村八
分にしました。完全ないじめ
です。大の大人が、会社側の管
理職が必死になつて前近代的な
村八分にするように奔走しまし
た。私は共産党の主張をすべて
賛同出来ないし考え方も違いま
すが、共産党を目のかたきにし
て社員をいじめるといふ会社側
の対応はまさに思想の自由を定
めた憲法に違反する行為で決し
て許すことは出来ないと思いま
す。思想の違いがあれど、こう
した会社側の姿勢は改めさせる

べきだと思えます。この問題は
国会でも追求されました。こ
うした思想差別の撤回を求めた裁
判闘争が長年に渡り行われまし
た。その結果、04年には会社
側と原告側とで和解が成立し、
会社側はこうした思想差別をし
ないとの約束をしました。しか
し未だにこの思想差別は裏では
続いているようで、私の知人も
会社側と尚も闘いつづけていま
す。この思想差別に石播労組は
見てみぬふりをし、人権侵害を
容認して来ました。まさに違法
行為に手を貸しつづけてきたわ
けです。元々人権感覚が欠けた
会社側とそれを支える労組とい
う絶望的な状況が石播には横た
わっているのです。

戦争遂行に命を
かけろ？これって
戦争犯罪じゃないか？
現在、アフガニスタンではア
メリカがいつ終わるとも知れな
いアルカイダとの戦争にあけく
れていきます。マスコミ報道は完
全に途絶えています。まだまだ
に米軍は現地で空爆を行い、多
くの民間人が殺されています。
テロとの戦争を名目として何の
罪もない民衆が数多く犠牲に
なっています。その一方で日本
の小泉首相はこの戦争を支持
し、インド洋に自衛艦を送り出
しています。現在、自衛艦が
日々米軍に石油を補給してお
り、その石油を使って空爆し、

多くの民間人が殺されていま
す。単に石油を補給しているの
であつてこれは戦争ではないと
小泉首相は主張しています。し
かし明らかにこれは戦争であ
り、小泉首相の論理は子供でも
はつきりとベテンだと分かるも
の、だと思えます。

さらに防衛庁は、自衛艦の修
理のために石川島播磨重工業な
ど数社に社員を派遣するよう要
請してきました。自衛艦など機
械を修理するためには専門知識
が必要とされるため、製造メー
カーの民間技師の力が必要で
す。防衛庁の要請を受けて、そ
れらの企業から、従業員に業務
命令が出され、すでに数回に渡
り、動員されています。このイ
ンド洋も戦争行為のただ中にあ
るので、戦場なのです。

万が一攻撃に合つても不思議が
ないのです。これは給油という
戦争行為に民間人が加担した事
を意味します。つまり戦場動員
がすでに実現してしまつたとい
う事です。この場合、会社側は
業務命令として人の命を奪つて
こい！と命令したのと同じこと
です。しかしもつとおどろくべ
きなのは、この会社側の命令に
対して石播労組は抵抗する所か
それを積極的に推進する立場を
取つた事です。

のたの現地派遣は、テロに会
う危険もあり、石播のモットー
である「安全はすべてに優先す
る」にも反するので、実態を調
査するよう要求しました。(注
1)この時、支部執行委員長は
私見、だとしてつても、次のよう
な回答を明らかにしました。

1. このミッションは国防上
必要なことであり、十分な準備
をしたうえで、遂行されなけれ
ばならない。
2. わが社は、国防において
重要な役割を担う企業であり、
これを否定する者は勤務を続け
ることはできない。
3. ニュースソースを示すよ
う求める。示さないならば、仮
定のことを調査する時間は、当
方にはない。

当時のアメリカのイラク攻撃
を断念させるために、世界各地
で大きな反対集会が次々と開か
れていた時で、労組委員長の見
解は、私見とはいえず、アラビヤ
海に自衛艦が出動することを国
防と切り切る異常な好戦姿勢、
これに協力しない者は会社を辞
めよと言いつける人権無視、さら
に、組合員の生命にかかわる問
題でも調査すらしない冷酷さ、
には唾然とする他ありません。
会社を軍隊と同じようにしよう
と考えているようで空恐ろしさ
を感じます。

チャンスです。会社と一体と
なつて人の命を奪おうがともか
く利益を追求する、それが一人
一人の労働者に求められ、それ
を労組も支えているというグロ
テスクな構図です。これもまた
企業内部にいるものにとつてこ
く常識に従つて行動しているだ
けなのかもしれませぬ。ただ、
し、一般常識として企業が人の
命を奪つて良いというのは決し
て許されるものではありません
ん。先にふれたゼロコミユニス
ト運動で労使一体の村社会をつ
くる中でごく当たり前の常識を
石播労組は喪失してしまつたと
言えます。これは会社側も労組
も同じく戦争犯罪を日々遂行し
続けているという事だと思いま
す。

注1石播の「安全5原則」は、①
安全はすべてに優先する。②危
険な作業はしないさせない。③
不安全事故の先取り。④ルール
を守る。⑤自ら努力する。
アメリカは止まらない！日本の
植民地主義も止まらない！

ここでもう一度植民地主義の
問題に立ち返つてみたいと思ひ
ます。アフガニスタンでのアメ
リカの戦争が何をもたらしたの
かといえは親米派のカルザイ政
権が樹立されました。アメリカ
の気に入らない政権だから攻撃
し、首をすげ替える、これはア
メリカの歴史で何度となく繰り

返されてきました。中米のグラ
ナダ、ニカラグア、パナマなど
に対して軍事的な介入が繰り返
されました。そしてイラク攻撃
でもそれが繰り返され、現在、
親米政権がつくられています。
これは間違いなく傀儡政権で植
民地主義以外の何ものでもあり
ませぬ。

テロとの闘いというのはまる
で魔法の杖のようなもので、そ
れですべてが正当化出来るよう
な魔力を持つていているようです。
歴史上、植民地という過去の事
と言われがちです。しかし目の
前で進行しつつあるのはその植
民地主義は何ら終わつていない
という事実です。

日本はこのアメリカの植民地
主義に全面的に賛成し、テロと
の闘いには協力を惜しまないと
いう姿勢です。イラクには自衛
隊が派遣されています。復興支
援が目的と言われていますが、
航空自衛隊が米軍への物資輸送
に関わっている事からも、それ
は米軍の占領と戦争を後押しす
るものだと考えます。というよ
り参戦していると言つた方が良
いでしよう。良く考えてみると
日本はアフガン、イラクと2方
面で戦争を遂行していることに
なります。実に恐ろしい事だ
です。私たちの税金は日々、だ
まつていても人殺し、戦争に使
われているという事を意味して
います。
しかしもつと恐ろしいのはこ
の闘いはいつ終わるとも知れな

いということ。アフガニスタンもイラクも政権が首都近辺を押さえているだけで、多くの民衆がアメリカの植民地主義に抵抗しており、米兵の死者は日に日に増加の一途をたどっています。まさに泥沼の状況です。さらにアメリカは次のターゲットとしてイランへの攻撃を検討している」と指摘されています。今年6月の大統領選挙で反米派と言われるアフマディネジャド氏が当選し大統領に就任しました。今後、戦火が拡大する可能性も完全には否定出来ません。9月11日の衆議院選挙で自民党が圧勝し、小泉首相はこの2方面での自衛隊派兵をさらに延長するつもりです。戦争の激化の中で危険性が高まる中で小泉首相は思考停止状態であるに似て、この状況でいえるように感じます。まさに日米両国による植民地主義は止まらない！といった状況です。

植民地主義の労働運動に未来はあるのか？

もう一度問題を整理するとあの朝鮮への植民地支配を正当化する言説はまさにアフガン、イラクで植民地主義と戦争が遂行されるという時代にぴったりと一致するようなものであった事が分かります。つまり現在の植民地主義を正当化するには過去の植民地主

義が正当化されなければならぬという図式です。現実には石播労働組は戦争動員に賛成し、植民地主義に荷担する戦争犯罪を犯しています。それはすべて国益という名を借りた石播という企業の私利私欲に他なりません。いくらその罪を追求しても会社が存続するためにはやむを得ないと正当化しているのかも知れません。

今や、日本はアジアにおける外交政策で行き詰まりつつあります。靖国参拜問題で中国・韓国からは厳しい目線で見られています。さらに今後は、なんでもアメリカのいいなりという姿勢に中東諸国から反発が強まるでしょう。実際にイラクでは自衛隊が急速に支持を失い、反日感情が高まりつつあります。つまり日米両国は足なみをそろえて世界の孤児となりつつあるのです。おそらくこの植民地主義に未来はないと思います。

植民地主義の労働運動に未来はあるのか？

石播の労働組は会社の利益のためだとすべて正当化するでしょうが、現に日々家族を失う悲しみを味わい、反日感情を強めるイラクの人々には決して通用しないのです。そもそも人の不幸こそがビジネスチャンスといふこの資本主義体制は道徳的に果たして正当化できるものなのでしょうか？多くの敵を周りにつくり、世界で孤立する道を歩むというのとはとても認められないでしょうし、決して長つづきするものではないのです。歴史的

に多くの民衆の闘いによってアジアにおける植民地支配が解体されていった過程を見るならば、果たしてこの植民地主義的な労働運動に未来はあるのか？と疑問に思います。そもそも自分達を守るべきはずの労働者を戦地に差し出し、会社のために命を捨てるというとはもはや労働組合の名に値しないと言えます。まさに労働者を殺人者として送り出すという体質は断固として糾弾されるべきです。精神的にもそれは労働者を加害者に仕立てあげるといふ意味で苦しめるものです。歴史的には長時間の労働の苦しみからの解放を求め、労働組合は8時間労働制という大きな成果を勝ち取りました。人間解放こそが労働組合の根本的な理念のほずです。それが他国の人々を苦しめ、労働者を加害者として駆りたてていくとなるとまさに解体されるべき対象と言えます。先ほどふれた、私の知人は現在、石播を退職していますが、今もなお、職場に残る仲間と共に、戦争賛成の職場の流れを変えようと奮闘しています。植民地主義の労働運動と果たしてどちらが未来の方を向いているのでしょうか？あえて問うまでもないと思いますが、あえて石播労働組にはそれを問わざるを得ないのです。そして、日々税金で殺戮を遂行する政府とそれを容認しつづけている日本人民のあり方も問わざるを得ません。2003年に有事関連法案が通

植民地主義の労働運動に未来はあるのか？

り、戦争への協力を義務づける流れが憲法改悪への動きと相まって忍び寄って来ています。今の時代の流れを容認するのはいかな、私たち一人一人の選択が問われているのです。最後にもう一度声を大にして言いたいと思います。「この労働組の名を借りた植民地主義を決して認めない！」

※この文章は知人のW氏の協力をなくして書けませんでした。感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。石川島播磨重工業の戦地派遣の問題もW氏が声をあげなければ社会で抹殺されていたはずで、その地道な運動の継続には敬意を持っています。お互い違う現場にいます。今後とも連携していくという思いを込めて、この文章を捧げたいと思います。

石川島播磨重工業労働組合連合会
TEL 03-3531-4311
TEL 0424-23-1828
FAX 0424-23-1816

☆戦地派遣に反対し、人権侵害と闘っている石川島播磨重工業の労働者に激励メッセージをお願いします。
〒188-0001 東京都西東京市谷戸町1-3-14
人権回復を求める石川島播磨原告団
TEL 0424-23-1828
FAX 0424-23-1816

☆皆さんもぜひ石播労働組への抗議の声をあげて下さい。
〒104-0051 東京都中央区佃2-12-14

石川島播磨重工業労働組合連合会
TEL 03-3531-4311
TEL 0424-23-1828
FAX 0424-23-1816

☆戦地派遣に反対し、人権侵害と闘っている石川島播磨重工業の労働者に激励メッセージをお願いします。
〒188-0001 東京都西東京市谷戸町1-3-14
人権回復を求める石川島播磨原告団
TEL 0424-23-1828
FAX 0424-23-1816

☆皆さんもぜひ石播労働組への抗議の声をあげて下さい。
〒104-0051 東京都中央区佃2-12-14

「日本と韓国の間」

「日本と韓国の間」
横たわる深い溝

史上初のワールドカップサッカー共同開催の成功や2003年冬のソナタなどに代表される韓流ブームなどで韓国が一般家庭の中でも非常に身近に感じられるようになりました。さらに、今年には国交正常化40周年となる「日韓友情年」として21世紀を共に歩むパートナーとして両国関係の礎を築くべく各種交流事業が行われる予定となっています。

一方で、島根県議会が2月22日を「竹島の日」と制定する条例案を提出したところ、同県と

「日本と韓国の間」

姉妹提携をする韓国・慶州北道が交流を中斷、韓国政府も外交通商省の訪日を延期し、「竹島の日」条例撤回要求や歴史問題解決など日韓関係に関する声明を発表しました。また、先に開催された「3・1独立運動記念式典」の演説で韓国の盧武鉉大統領が日本と韓国との過去の歴史に触れ、日本に改めて「謝罪と賠償」を求めました。さらに、日本人拉致問題にもわざわざ言及し、「(日本統治時代に)数千、数万倍の苦痛を受けた我が国民の怒りも理解すべきだ」と述べ、日本における北朝鮮非難の雰囲気批判し、教科書問題についても相変わらず批判の対象にしてきました。

なぜ、戦後60年経ってもこのような問題が持ち上がってくるのでしょうか？韓国の感情的な態度はどこからくるのでしょうか？日本は本当に悪いことをしたのでしょか？

外交上の問題とはいえ、両国が未来に向かつて真の意味でもパートナーシップを結ぶためには、建て前ではなく本音で論議することが重要です。そのためには、国民一人ひとりが正しい歴史を学び、正しい歴史認識を持つことが必要です。そこで教科書には載っていない真実の日韓の歴史をひも解いてみましょう。

「日本と韓国の間」

「日本と韓国の間」
横たわる深い溝

史上初のワールドカップサッカー共同開催の成功や2003年冬のソナタなどに代表される韓流ブームなどで韓国が一般家庭の中でも非常に身近に感じられるようになりました。さらに、今年には国交正常化40周年となる「日韓友情年」として21世紀を共に歩むパートナーとして両国関係の礎を築くべく各種交流事業が行われる予定となっています。

一方で、島根県議会が2月22日を「竹島の日」と制定する条例案を提出したところ、同県と

「アジアに進出してきた 西欧列強国」

1894年に朝鮮で農民の反乱(東学の乱)が起こり、朝鮮は清国(中国)に援軍を求める、日本も在留邦人の保護のために出兵し、日清戦争が起こりました。近代的な装備を持つ日本が各地で勝利を収め、1895年に清は降伏し、清は朝鮮の独立を認めるなどしました。

日清戦争後、弱体を暴露した清国に対して西欧列強国の侵略が顕著になり、中でもロシアは不凍港を求めて南下し続け、日本領であった遼東半島(旅順、大連)を奪い、満州をも領土化しようとしてきました。

日本はこの脅威を排除するために、1902年イギリスと日英同盟を結びロシアに警告するも、その進攻は止まらず、1904年ついに日露戦争が始まりました。ロシアとの圧倒的な火力の差をもとめず日本が勝利を収めました。この日本海海戦における東郷平八郎司令官率いる連合艦隊の勝利は日露戦争の勝利を導く上で決定的な役割を果たし、日本に平和をもたらしました。

この19世紀から20世紀初頭の東アジアの情勢は大きく3つのポイントがあります。①イギリス、ロシア、フランス、オランダ、アメリカ、ドイツなどの西欧列強国の武力脅威②この

ようなときに頼りになるはずの中国(清国)が自国の領土保全もままならぬ老廃国で、朝鮮はその属国に過ぎなかつたこと③

中国と朝鮮は民心を失い無力であつたにもかかわらず、日本に対して根拠なき優越感を示し、扱いにくく手に負えない存在だつたこと。両国はともに中華思想(中国は世界の中心である)、東夷思想(東に住む野蛮人日本人)に閉ざされているため最初から侮日感情を抱いていました。これが現在にいたるまでの両国との感情的なもつれの原点です。

「朝鮮からの併合を望む声」

さて、話を朝鮮に戻します。

1904年、日露戦争開始以前に日本は朝鮮との間で日韓議定書を結んでいます。これはロシアが朝鮮領内に侵略的な行為に出たときは、日本が排除するというような内容のもので、これが、日本が朝鮮を保護国とする第一歩になつたことは間違いないと見ます。日本が朝鮮を保護国としていたのは、決して

西欧列強国が植民地化し、富を搾取するようなものではなく、侵略国から守り、どうにかして朝鮮を立ち直らせようと思つたからです。しかしながら、1910年、遅々として進まない政治改革に痺れを切らした日本は、反対派の伊藤博文が安重根に暗殺されたのを機に日韓併合

条約により朝鮮を併合しました。また、朝鮮内でも腐敗した李朝政府に対する反発からロシア、中国よりも日本との併合を支持する政治団体(一進会)が近代化を目指そうと日本併合を望む運動を行い、100万人以上の署名が集まりました。同時にこの併合は国際社会にも認められた、合法的な条約でした。(朝鮮側はこの間を「日帝36年」といつている)

「日韓の関係を正常なものとするためにも正しい歴史認識を」

結果として、日本は朝鮮と直接戦火を交えたこともなく、清からの独立を助け、ロシアの南下を食い止めたという事実だけが残ります。そしてそのために、日本人の血も流れたことも事実です。しかも日本人の納税者の金で、治山、治水、教育、医療、鉄道、道路、食料増産など朝鮮の社会的基盤整理を行ったわけですが、これが余計なお世話といふことであれば言葉もありません。

自分の不利なことは全部人のせいにして、自己の反省が全くないことが日本と韓国の大きな違いと言えるでしょう。(最近ようやく韓国国内でもこの説を唱える知識人が現れてきました)

のような経済格差、民族意識に由来していることは歴史からも明らかです。

最近、映像、音楽などの文化では交流が進んでいるのに、相変わらず政治の道具として使われる歴史問題と領土問題。そろそろ毅然とした態度で歴史問題を解決し、真のパートナーとしてありたいものです。

日本人であることを誇りに思い、日韓の歴史を正常になるよう務め、若い世代に伝えていくことが私たちの役目です。>>

資料② 石播労組に出した要請文

石川島播磨重工業労働組合連絡会殿

「あいROREN」の「労連の主張」の撤回と謝罪を求めると要請文

私は〇〇に住む市民の一人です。最近、貴労組の発行している雑誌「あいROREN」2005春号VOL.8に掲載された労連の主張を読み、その内容には見過ごす事の出来ない問題があると思ひ、撤回を要請いたします。この「日本人であること」を誇りに思う「日韓の歴史」という文章はあまりに露骨に朝鮮半島への植民地支配を正当化する内容で驚きと怒りを禁じえませんでした。これは朝鮮半島に住む人々の心を傷つけるもので日韓の間の溝をますます深めるものです。

この文章では日清戦争は在留

邦人の保護のため、日露戦争はロシアが脅威となつてきたからと全て戦争の原因を他人のせいにして正当化しています。この文章で貴労組が記述しているように日本領の遼東半島(これは本来中国のものだつた領土を奪つたもの)をロシアが奪つたから奪い返すために戦争を起したという事は、日露戦争は中国を植民地支配するために日露が争つた戦いであつたことを示しています。西欧諸国のように富を収奪するための侵略ではないといいますが、力づくに領土を奪い合い支配しようとする姿勢を歴史的に植民地主義と呼ぶのです。貴労組は「自分の不利なことは全部人のせい」に、自己の反省が全くないことが日本と韓国の大きな違いといえるでしょう」と述べています

が、それはまさに貴労組の態度そのものです。さらに許せないのは「弱体を露呈した清国」「中国が自国の領土保全もままならぬ老廃国」「朝鮮はその属国に過ぎなかつた」と隣国である中国や朝鮮を貶めるような文章が続いている事です。戦前の日本はアジア諸国を侮蔑し日本がアジアの盟主だとして戦争を繰り広げてきましたが貴労組の認識はまさにこの当時の野蛮な植民地主義と同じです。こうした認識ではアジア諸国と信頼関係を築く事は出来ないでしょう。

「朝鮮併合は日本との併合を

望む声があり、それに応えたものだ。それは西欧列強から守るための行為だ」という主張は1919年3月1日に述べた数百万人の人々が朝鮮半島独立を叫び参加したとされる3・1独立運動が起つたことを無視するもので、まさに歴史を知らないといえます。もし、かつて朝鮮半島が置かれた立場に日本が置かれて、日本が「お前は一人で立できないから植民地支配してやるぞ」といわれた時に、はいそうですと答えられるでしょうか?相手の立場に自分を置き換える想像力が欠如した、まさに一人よがりな考え方だと思ひます。

又、貴労組は「日本の納税者の金で朝鮮半島では治水、教育、医療、鉄道、道路など様々な社会的基盤整理をした。国からの独立を助け、ロシアの南下を食い止めるため、日本人の血が流されました。」などと主張していますが、鉄道網も日本が朝鮮半島を支配するための都合でつくられたものです。戦前、日本は米の完全自給が出来ずに朝鮮半島で米をつくらせて、日本に大量に輸入していったため、朝鮮半島での米が少なくなり、一人当たりの消費量が下がっていたという歴史があります。この当時、米を運ぶのに鉄道が活用されていたはずですが。

医療観察法の強行適用を

弾劾する！

北村 裕

多くの反対の声にも拘らず、一昨年7月強行採決により成立した「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行ったものの医療および観察等に関する法律」(以下、医療観察法)がこの7月15日その施行期限を迎え、政府は施行を強行した。

も責任の所在が不明確であるなど、これまで出されてきている批判に一切答えるものとなっていない。

すでにこの法の適応者は、7月19日の東北新幹線内で消火器で乗客に全治1週間の怪我を

させた男性を第1号の申し立てとして、すでに16例(8月19日段階)が適用され、鑑定入院の措置がとられている。傷害事件のほとんどが1、2週間の微罪で、通常であれば直ちに釈放されるケースであり、施行日

前に起きた事件を遡って適周など、精神病患者と認定すれば、どんな些細な事件であっても差別的な拘禁と監視下に置くという姿勢を示すものである。

私たちは、このようななりふり構わない適用を糾弾する。直ちに鑑定入院命令を撤回し、速やかに本人に対し医療保障することを求める。

精神病患者というだけでこのような差別的な拘禁と監視をもたらず保安処分に対処し、医療観察法の廃止に向けて闘い抜こう。10

この法律の名称には「医療」が入っているが、再び同様の行為を行う恐れがなくなるまで精神病患者を差別的に拘禁する予防拘禁法であり、保安処分である。

厚生労働省は、全国8ヶ所にこの保安処分施設の建設を予定していたが、各地で精神病患者や地元住民による建設反対の声にあつて着工することが出来ず、施行当日までに施設が完成したのは国立精神・神経センター武蔵病院(33床)のみである。そればかりかそこに配置されるスタッフも不足し、この法の運用に関するガイドラインも、「人格障害等も含めるのかなど対象者の選定がいまいちで、特別な治療法が明確にされているわけでもなく、退所後のケアにして

「帝国」 (ネグリ&ハート著) について

書評

旭 凡太郎

「労働の拒否」論

ネグリといえば一九七八年のイタリア「赤い旅団」の関係者として逮捕、亡命・・・ということでも知られてきた。またアウトノミア運動の理論家としても知られ、独特の資本論理解(『マルクスを超えるマルクス』)でも知られてきた。

なかんずく固有の労働者主義と、反生産主義ないしは「社会的労働概念」(剰余価値を流通や社会一般から導く、ないしはそれに拡張する。)との組み合わせとして知られてきた。

それはいわゆる政治闘争でも労働運動でもない、「労働の拒否」といったスローガンとして集約されてきたものである。(これについて『マルクスを超

えるマルクス』の紹介をしているマイケル・ライアン氏は「六〇年代の学生運動は工場での労働者の自立した決起(特に自動車工場)の爆発と結びついて・・・「労働の拒否」(とりわけ無断欠勤とサボタージュとしての拒否であり、労働時間と支払われる賃金との間の虚構の等価をうちたてる価値法則の否定である)と、政治的あるいは社会的賃金、すなわち生産性とは無関係に最大限の賃金を要求することであった、としている。

それはネグリのいう小流通(いわゆる商品流通一般にたいする労働力の再生産過程、あるいは労働者からする購買、消費)、大局的には労働からの解放、総じて「非労働」に労働者

の解放、創造力を見出す、とする見解と対応している。たとえば「ここで(小流通)貨幣は(プロレタリアの)自己創造価値に付属している(マルクスを超えるマルクス」P258)」と。

こうしてネグリの場合ある意味資本-賃労働関係を基礎に据えようとしてはいる。その限りにおいては現代思想なりラディカルデモクラシーとも気色を異にしている。

他方この資本-賃労働関係を社会一般、流通、労働者による流通、等外部から批判し、そこに解放、創造性、といったエネルギーを見出そうとしている。そういった意味では一部の風潮のあらわれ、ともいえる。プロレタリアートでもない、

これらの論点の正否ということとはあるが、いずれも資本-賃労働なり労働制度をめぐってではなく、それからの外的性格とすることがある。すなわち現代帝国主義批判にあつて、ネグリなりにあつた資本主義批判が貫徹しきれていないということが最大の問題といえる。

(MR) 研誌で仲政氏は「全部が△帝国Vの内部になつてしまえば全人類が市民になつてしまふわけ・・・」といったところに戦略があるのだと解説している、あたらずといえども遠からずといった感もある。がわれわれはネグリのそれを含めて資本主義批判との関連に固執しよう。国家、(労働力)再生産、二

『帝国』と「労働の拒否」論

だが彼(等)は、この『帝国』において、そうした観点を現代

重権力、そして今日の帝国主義と民族植民地問題等はそれぬきには無なのだ。」

「帝国」への移行、を言うとき、直接的には植民地支配の終焉、多国籍企業によるグローバリズム、アメリカの世界標準化・世界の憲兵化・・・という比較的常識的な1990年代の現実の表現を意味している。

ネグリにとって不幸なことに出版(2000年)直後のイラク戦争は、帝国主義世界の分裂とプロレタリアートのグローバルな統一のはじまり(それは彼の「マルチチュード」よりアリティがある)を告げた。

(それは『帝国以降』イマニエール・トッド著)などフランス・ヨーロッパのインテリ、エリートによるアメリカ島国論、特異論をクロースアップしてきた。

しかし i 変革主体としての「マルチチュード」という規定。

ii その前提としての1200-1600年ヨーロッパでのルネッサンス・人文主義にたいする反革命としての国民主権、人民、啓蒙の世紀、とする考え方。

iii 国家主権の抑圧性・区画制にたいする、資本の内在的・横断的性格という見かた。

iv アメリカ政体の構成的権力、アメリカ民主主義、アメリカ人

民の規範性、という考え方。 v 植民地の終焉と中心-周辺の非異質的な、量的な相違という性格評価。

vi 前述したごとく資本の下での労働過程支配・他人労働支配(市場、競争、利潤追及のものとしての労働・労働力の価値とひきかえでの)ということと、その科学、機械、分業、階層と格差、競争、差別構造、失業、資本による管理の巨大化をとうしての発展、といったことに対する外部や流通からのかかわりという問題がある。

こうしたことを労働過程(労働力)再生産過程、国家、上部構造、労働者人民による運動・二重権力・・・として立体的にたてることなく、社会的労働、移動性・流動性、ネットワーク、マルチチュード、といった社会性一般によって「解決」してしまっている、という問題がある。

多国籍企業Ⅱ内在性・ネットワーク? まずもって多国籍企業は、抑圧的なものとしての国家、国民主権、と対立、対比させられている。(それは後述するように啓蒙、理性、規律へのルネッサンス、人文主義の対置とセットになっているのだが)

すなわち『帝国』においては一方では近代国家批判は啓蒙、理性、規律批判はさらに国家主権批判へと展開されている。

「国民という近代的概念が君主制国家の世襲的身体を引き継いだ(P132)」「人民は主権のために整えられたすでに構成済みの統合体」「人民は単一の意志をもたらず(P142)」「マルチチュード多様多様と対置されている」

これら国民主権が、更に植民地支配、植民地と排他的に区画されたヨーロッパ、帝国主義権力、さらに帝国主義戦争、ファシズム・ナチズムへいたったとされる。

これに対し資本は非中心的、横断的、内在的とされる。「資本はこれと逆に、権力の超越的中心にたよることなく、支配の關係の中継やネットワークをとおして内在性の平面で作動している。(P414)」。資本は脱コロド化、脱領土化、人口等流動化、共通の平面、内在的等展開されている。

しかし国家から資本の性格を推論するのは転倒である。国家の抑圧性、集中性、境界性は市場、競争、資本、そのもとの機械制大工業の科学、連続性、分業と階層制、差別等をとうした労働支配、さらには農業支配、さらに資本輸出等の回路を経ての民族支配、ということの結果であるといえる。(政治的國家と市民社会の分離というこ

とを経るが)。監獄と工場、救貧院との相互関係からもそれは知られてきた。

それは多国籍企業においてもおなじである。よりグローバルとなりEU等編成、境界の変更等がある。

そして単一化、規格化をもとめる多国籍企業、新自由主義のエネルギーが湾岸戦争、ユーゴ、アフガン、イラク戦争へと刈りたてているのだ。

さらにこの多国籍企業化をつうじて、自国労働者を他国、第三世界労働者と競争させ、大規模な首切り、失業、非正規化、資本の専制、職場の無法地帯化：といった労働への攻勢をしかけてきたのだ。

さらに弱体化した産業基盤と多国籍企業化をとうして金融、軍事、資源といったより略奪的・侵略的・軍事的帝国主義へと飛躍し、第三世界労働者人民への新自由主義的攻勢や、中東・産油地帯武力攻勢へと駆りたてているのだ(それは米・英・日対EUの分裂・対立へとも転化した)。

チユード)の可能性を想定していることでもある。すなわち「合衆国の政体が・・・八帝國的な政体となることを可能にしている要素、つまり果てしない自由のフロンティアという観念や構成的権力のうちに表現される開かれた空間性と時間性の規定をポストモダンなマルチチュードが奪いとる(『帝国』P504)」と。ただし「ユートピアの救済としてのアメリカ帝国」というこの観念がまったくの幻想(P478)」とも述べているのだが。

アメリカ自由主義・個人主義と賃労働・帝国主義

アメリカは、といえどもともとヨーロッパ貴族階級社会への批判ということもあって、徹底的に自由主義、功利主義のユートピアを追及したといえる。

あるいはロック的な「労働と所有の統一」型生産者のユートピアを出発点としたとも言える。(広大な土地と開拓自営農民)

もちろんそれは先住民追放や、奴隷制と並行したように、徹底した階級社会の歴史にすぎないのだが。すなわち資本主義発展・独占の発展によって、ライトミルズがいうように「財産が集中されたため人間の本質的自由の基礎となっていた財産と労働の調和は失われた(『ホワイトカラー』)のである。

それにもかかわらず広大な土地-フロンティアの残存と、帝国主義戦争勝利や、フォードシステムや、多国籍企業の展開はアメリカンドリームなり、機会の保証といった神話を温存してきたが、ITバブルや遺伝子工学の幻影の終末とともに挫折してゆこうとしているわけである。同じライトミルズの文書では「市場は自由な個人をうみだす手段であり」「競争によって人々は文字どおり独立独歩の生活をしてきた・・・優れたものが勝ちをしめ、人間の性格が向上してゆくのだと自由主義者は信じていた」ともされている。

すなわち資本と賃労働は資本の認定する能力差のヒエラルキーとしても合理化されてゆくわけである。

あるいは資本のもとの科学、指揮管理と分業、位階制のなかに編入されてゆくわけである。 こういった市場資本主義原理主義的伝統もあって、ニユーデールや、公民権運動にたいする、静かな反革命をいちはやく多国籍企業支配下の新自由主義として1970年代にたちあげたわけである。(ヨーロッパ、日本への巻き返しということが基本にあったが)。それは1980年代アメリカ社会を席巻し、さらに全世界をまきこんできたのである。

たしかにアメリカ帝国主義

は、対イラク戦争をふくめて単純な帝国主義とはいえない。「合衆国がそれ自身の国家的動機に応じてではなく、グローバルな法権利の名において、国際正義を管理運用することのできる唯一の権力として登場した(『帝国』P233)という面はある。『湾岸戦争は新世界秩序の誕生(P233)』、という形をとりながら1990年代にそれは頂点に達した。

それは前近代、旧共産主義はもちろん、国家保護、アンチグローバルズム、等の存在を許さず、多国籍企業、新自由主義の独裁をおしすすめようとするのだということが出来る。

アメリカは 1 共産主義はもちろん社会民主主義の勢力を前提しない、首きり自由をふくむ自由主義・新自由主義の祖國的位置にあり、2 植民地支配より多国籍企業支配に親和的であり、3 多国籍企業とその生産力的基礎—フォードシステム、コンピュータの発祥の地であり、4 ニューディール・公民権運動への反転攻勢—静かな反革命としての新自由主義の発祥の地でもある 5 ソ連と対抗した軍事力を保持し 6 金との交換性停止後も無制限のドル散布による NICS 製品等の購入・実現等をとうして世界経済拡張の基礎となった。等をとうしてそういった地位を築いてきたといえる。

しかし他方 双子の赤字に代

表されるドル危機の進行と産業防衛という問題に直面しつつあり、対抗勢力圏として EU が成立し、首きり自由・格差・弱肉強食とイラク戦争が同一のものであることに世界の人民が気付きはじめてきた。そしてイラク戦争をとうして、石油や EU や社会民主主義をめぐる対立とも重なり、反戦・反グローバルズムの国際的統一が進行しているといえる。

すなわち世界標準、世界の憲兵的位置からのアメリカの凋落が開始したというのが現在といえる。

ネグリの資本主義理解—

「経済学批判要綱」 「資本論」をめぐる—

こうした多国籍企業、アメリカ民主主義、からする旧大陸、ヨーロッパ帝国主義への批判は、冒頭で述べた彼の資本・賃労働関係への外部からの、流通からの、労働者による購買からのかかわりということと関係がある。

一面的には、彼が経済学批判要綱から援用した鋭い資本主義批判があり、また「政治闘争は工場闘争を社会闘争に接合すること(『マルクスを超えるマルクス』P390)』といった意図があつたにもかかわらず、たとえ彼は経済学批判要綱

を援用して「労働者は自らの労働能力、自らの創造力を譲渡(疎外)し、資本はそれを等価交換の外観のもとで包摂する(同 P162)』と述べている。これは正しい。

がネグリはここからあととどろし、ないしは「剰余価値法則」一般に解消するわけだ。

だがこうした賃金(労働力の価値)とひきかえに資本が手にする他人の労働能力・創造力の処分権・支配権、すなわち労働過程の支配ということがあり、資本主義批判はここからはじまる。

そして i 剰余労働(剰余価値)の取得を含んで、生産の目的、方法、指揮管理の資本による支配がある。 ii そしてそれはまた科学、自動機械、分業編成と労働の細分化、位階制、差別・格差と相互の競争、失業、各種相対的過剰人口・・・をも資本の無制約の力に転化する。(相対的剰余価値生産) iii 流通—市場・競争・信用・恐慌はこうした資本の無政府的暴力的運動の相互作用ではあるが、しかしこの流通・直接的生産過程を統一したものである。資本の力は労働者を抑圧する力でもある。

・・・といった方向には進まない。

逆に「剰余価値から利潤への転化の分析は(流通を通じての)社会化の分析と統合され、(同 P177)』それは「剰余価値

の社会的拡張がひきおこす搾取の新しい質(同 P178)』の問題とされている。

そして「剰余価値の社会的拡張・・・は労働過程で生産される価値に関連づけることもできない。なぜなら、それは社会的労働の総体によつても無償で形成されているからだ」(それは)資本の価値を保全する労働のこともであるし、広範な大衆の協業によつて豊かになつた労働だけでなく・・・社会の潜在的な科学から引き出される労働のこともである(『マルクスを超えるマルクス』P176)』としているわけである。

しかし前述したように、賃金とひきかえに行う資本の他人労働支配とは、資本による労働過程支配を科学、機械、分業、協業、労働生産性、差別・・・を自己の力にすることによつて行われる支配のことである。

逆にいえば、賃労働からの解放とは(資本の廃業や労働時間短縮を不可分とするが)、こうした科学、管理、経済計算、労働をふくめて全成員が自主的・意識的に順番制をふくめて参加・運営してゆくことといえる。それを相互に保障しあつてゆくことを含むのである。(同時に路線、価値観の相違・対立をも論争・結社間競争をとうして合い争う過程でもある)

こうしてネグリは小流通は「必要労働の価値が再生産される部面」としたうえで「必要労働

働だけが、資本の価値増殖に對して自らの抵抗—すなわち自身自身の維持—再生産という抵抗—を対立させる(同 P253)』と抵抗なるものを極めて狭い世界にとじこめるわけである。

(しかし労働者の消費も、労働力の再生産過程として、資本の再生産・労働過程に従属させてゆく構造にある。—後述)

労働者評議会、二重権力、ブルジョア国家機構

これは彼のいう対抗権力—社会的労働なるものが、それ自体においてブルジョア国家機構に對する二重権力として徹底しえたか、そこにおいて小流通や、労働の拒否、等がどのような役割を果たしたのかという問題である。

そこでは

i フォードシステム以前の産業的労働は労働者評議会による共和国、生産者の評議会。

ii フォード・テラー主義体制は大衆労働者—工場労働の拒否—社会的生産へ拡張ということや、大衆的労働組合—福祉国家—社会民主主義ということや、共産主義というオルタナティブと対抗権力である。

iii 今日(ポスト・フォード主義)にあつては非物質的な労働力(サービス等。あるいは移動性、流動性、知識、コミュニケーション、協働、情動的なも

の)と規定され、大衆的知性と自己価値化をむすびつけてゆく構成的権力、コミュニケーション・ネットワークを管理する権利、とされている(『帝国』P507~508)。

こうした構造は現象としてはある一面をこらえているとはいえる。しかしそれは前述のことき資本による労働支配の総体と、労働力再生産との関係なのである。

再生産や差別といった問題をこうした資本主義的生産、労働過程との相互関係としてとらえてきたのが、日本での部落解放運動以来の伝統なわけである。すなわち一元的ではないにしても、これを經由しないと語る

ことができないものとしての、第三世界、諸差別、農業問題、諸再生産過程(教育、家族等)といったことがある。

(差別なり再生産なりはこうした労働過程・労働力再生産過程と対極的に、(世界)市場、そして国家との相互関係においても在り、またされるのだが)

また差別、民族は、資本主義に解消できず、固有の歴史があるが、制度(労働—再生産)のおきかえという問題を提起して

もいる。すなわちそれらは賃金体系、ワークシェア、時間、労働契約(雇用)、(管理・労働をふくむ)職務・職業選択・決定権、等制度そのものの労働者・住民による決定権といったことまであ

る。すなわちすなわち他人労働支配の廃止や分業止揚までの幅がある。(管理、労働、職務のローテーション・順番、くじ引き、選挙等多面的だが。)

資本のもとでの生産力の発展(産業構造の変動や、労働・消費様式の変動)は投資が投資をよぶといったブームを作り出す面もある。が、しかしそこで資本と労働や農業の関係の変動や、他方での労働者の文化、経済、政治、管理等への潜勢力の変動や、欲求の変動や、労働時間短縮問題等の変動をつくりだす。

しかし同時にその資本主義発展は、経済的文化的欲求・能力をふみにじるのみならず、競争や、差別・格差や、失業や生活不安を加速させるわけである。・・・といった上記資本・賃労働、(労働力)再生産過程をめぐる対立関係を発展させるということでもある。

そうした戦線は資本主義―帝国主義にたいするプロレタリアート・人民の対抗的戦線、二重権力への構成要素ともなる。そういった資本の廃棄、ブルジョア国家権力の破壊、を二重権力・自己権力によってとってかわることとして行い、といった内容への代替として彼らの主張があるのではないかということが疑われる。すなわちその資本概念の解体(流通、社会的資

本への)、構成的権力・市民権・協働・コミュニケーションネットワーク、といった主張がである。

軍事・官僚機構の発達と賃労働制度の発達

こうした資本・賃労働関係の断片化は、同時にブルジョア社会の総括としての国家、すなわち市民社会から形式的に分離して公的・暴力的・ヘゲモニー的・階級的機能を集中・独占するものとしての国家批判の、構成的権力論による単一的国民権国家批判への解消としてあるものと考えられる。

すなわち前述したように近代国家批判が、賃労働制度批判とは無関係に単一の意志・国民主義権批判や啓蒙思想批判(マルチチュード、多種多様と対置された)へと代替されてゆくわけである。

この歴史の領域では文化、思想という観点からブルジョア社会前期の二つ潮流の分岐が問題とされている。すなわち冒頭引用したごとく、それは「反革命的企て」としての「啓蒙の世紀」にたいするルネッサンスの人文主義(力強さ、欲望、愛)の対置(『帝国』P111)といったことであった。

しかし「労働制度」とその思想の分岐、という観点からするとそれほど単純ではなくなる。そこでは17世紀のロッキ

「労働と所有の統一(『市民政府論』)―実際にはこれも単純ではないのだが―の自己分解というながれがある。

1 そのロック以後、労働と所有の分離のみならず、機械・分業・階層制、位階的指揮管理、競争、差別や相対的過剰人口の発達、そして指揮・管理・経営権の巨大化と労働への支配が進行した。

2 それをうわまわる資本の集積、市場の運動の巨大化が進行した。それは帝国主義と民族植民地問題や、市場再分割戦や、帝国主義戦争の原動力となってきた。

3 私的過程に転化した巨大な労働・経済過程にたいして、このブルジョア社会内部から発生する矛盾・対立にたいする公的・意識的・ヘゲモニー的階級的解決機能を独占した国家機関―軍事・警察・官僚機構の肥大化という展開があった。

こうしたなか一方での労働と所有の分離―他人労働の支配―、すなわち資本と市場の自由・支配とこれを合理化したミス、功利主義のながれがある。

資本、他人労働の支配といったも、機械制大工業、分業、科学と労働の単純化・細分化といった過程があり、ここに啓蒙主義、理性主義、合理主義は基盤を据えた。

しかし啓蒙主義は功利主義

自由主義―自己利益の追及や、他人労働支配や、競争を無制限に肯定する―への批判としてもあった。

ルソーの「人間不平等起源論」とフランス革命の関連がそうである。またカント、ヘーゲルの道徳論や市民社会批判にもそれがある。その権利論を経ない義務論や国家主義の問題はあり、かつ大枠としてはブルジョア中央集権的軍事官僚機構の動力となったのではあるが。

しかしフランス革命にたいするイギリス革命、アメリカ革命の対置(自由主義やハンナ・アレント。その設計主義批判―SENKIIもこのながれにある)が最近流行している今日、このことは無視できないといえる。

こうしたなかアナーキズムなり、マルクス主義は、個人の自由・権利ということを各人の社会・労働の運営参加における自立、すなわち自主的にかつ社会的判断をともなして行動することに求めた。その物質的ならびに能力的に可能な条件の形成ということ、あるいはそれらの相互保証、ということに求めたわけである。

すなわち資本(剰余価値生産)のもとでの労働支配―資本の管理や、科学や、機械の支配や、精神労働と肉体労働をふくむ固定化された分業や、労働の部分化や、各種相対的過剰人口：をとうしての―への批判

が登場してきたわけである。

「第三世界」をめぐる

それでは帝国主義の終焉、「帝国」への移行のもう一つの根拠とされる、植民地の終焉から「第三世界の視座の不適切化(P343)」についてはどうだろうか。

すなわち資本主義にとつて「もはや外部として認められうる場所はない(P277)」労働の強力な国際的分割は存続していたが、どこかの国の労働者階級が帝国主義的な利点をもっているという状況は衰退しはじめた(P342)。「それら(注：帝国主義第三世界)のあいだには性質の差ではなく程度の差がただだ(P424)」という論点はどうだろうか。

(これについては予定枚数をこえてしまったので『年誌』5、6号で展開しているので参照して下さい。※)

こうした近代国家批判を見ると、労働の拒否論にはあった資本主義批判を『帝国』のなかに貫徹できなかったといえる。

しかしすでにのべたごとく、フォード主義+サービ社会化社会の労働問題、70年闘争とそれ以降、啓蒙主義と自由主義、そして共産主義、アメリカ社会の独自性、植民地以降と資本主義化、多国籍企業とグローバルズム、・・・といったことへの問題

提起であるとはいえるし、時代も課題も共有している。時間をかけて理論的実践的共有性をつくりださねばならない。

※ 年誌5号

「マルクス経済学論争史と宇野理論―新田滋『段階論の研究』討論を機に―」年誌6号

「国家独占資本主義」から「多国籍企業帝国主義論」へ

(了)

一般労働者は

解放勢力ではなかった

『年誌6号』の補足

寄稿

植村 泰

かつて松尾匡はマルクス主義につき次のように書いた。

「マルクスの時代の大衆は、故郷も技能も土地も失い、それに伴って道徳も宗教も価値観も喪失し、日々生理的に生き抜くことに汲々としていた。だから彼らは、人間一般に共通する生理的客観的条件と個々の欲求が直接一致しているものであり、それと矛盾する価値観を抱くことはない。」

それだから、マルクスの場合（マルクスの生きた時代）、客観的物質的条件の変化を正しく反映した法則を唱えるならば、それが労働者の反発を受けることにはありえないことになる。客観的科学的法則として正しければ正しい程、それだけ益々それは労働者の立場と一致し、主観的にも労働者の意識に受け入れられるということになる。

は打ち消し合う。そして、そうした組織を通じて、最も客観条件を正しく反映した理論が、すなわち労働者の実感を最もよく反映した理論なのであるから、労働者の間に最も広く受け入れられていくことになる。従ってここでは、「科学」と、労働者の立場や彼らの主観的意識との間に、矛盾はない。

しかし、「唯物史観」そのものも、唯物史観に基づいて変化する。重工業が興って、エンゲルス死後独占資本主義の段階に入ると、複雑労働者階層が労働力の中核となる。

複雑労働力は単純労働力と違い、ただ単に生理的に生存しているだけでは生産できない。教育に資金と労働をかけ、持ち家や自家用車などの一種の「生産手段」にも投資しなければならぬ。労働力商品生産の専属労働者として、主婦も雇わなければならない。

かくして彼らは、単なる労働者としてではなく、小商品生産

おかまいなく、後から大衆の頭の中に注入されるべきものとされるようになる。こうしてレーニンの「唯物史観」の態度が現れることになったのだ。

しかも、先進国の複雑労働者は、資本制そのものを転覆しなくとも、周辺部の単純労働者への犠牲転嫁の上に、独占資本から譲歩を勝ち取るようになった。だから、彼らの実感を尊重すれば、労働者階級全体の利益に立つた革命の方針など出てこず、せいぜい体制内部での改良の方針が出てくるに過ぎず、悪くすれば、周辺部への抑圧を黙認したり支持したりすることになる。こうして、いわゆる「社会民主主義」が発生することになったのである。

これに対して、労働者全体の普遍的利益に立つた方針を出そうとすれば、もはや労働者の現実の実感に依拠することはできず、レーニンのように、大衆の外でエリートが方針を作り出すしかなくなる。それ故、20世紀の冒頭にマルクス主義が「社会民主主義」とレーニン主義に分裂し、今日まで対立し続けてきたことは、根拠のあることだったのである。

このように、特定の集団の立場に立つてその思いに同化するものと、普遍的な科学的客観性をめざすことは、重工業の時代という条件のもとにおいて、相容れないものになったのである。「ソ連」国家資本主義論

と唯物史観（参照。）
少し長い引用だが、この文はマルクスの唯物論とレーニンのエリート唯物論の説明である。このレーニンのエリート唯物論の産物、「帝国主義論」を理論的に批判した農業経済学者に渡辺寛（東北大名誉教授）がいる。

1973年刊行の「レーニンと帝国主義論」その論理と実証は三側面でレーニンを批判した。その一つが、非常に実証的な批判でレーニンの労働貴族論への批判である。レーニンは独占的超過利潤の分け前に与る先進国の一部労働運動上層部を「労働貴族」と定義し、その日和見主義の糾弾だけであり、資本の文明化作用をみていないと指摘。「レーニンの論理に欠けていたのは、国内における金融資本的蓄積のもとでの労働力商品化の構造から、帝国主義段階における労働運動の動向を分析するという視点であった。」という。

マルクスの生きていた自由主義段階の産業は綿工業中心の、ごく少数の男子熟練労働力と多数の女子・児童不熟練労働力という、労働単位が単身のシングル単位であった。これに対し、重工業中心の帝国主義段階は、不熟練とはいえ、殆ど男性所帯主の成人男子労働力をもつて基幹とするに至る。そこで金融資本的蓄積は「労働運動を従来の熟練工中心のもの

のから不熟練工中心へ変化せしめつつも、他方ではこれによって労賃の騰貴をもたらし、労働者階級の生活の向上をもたらして、その「体制内化」＝「日和見主義化」促進する。従って「革命化」の基礎としての新たな労働運動と、日和見主義とは、金融資本的蓄積から生ずる、同一の事態の両面として把握されねばならない。この把握が冒頭に引用した「社会民主主義」とレーニン主義への分裂の根拠となったわけである。

「僕の部屋は、宇野先生の部屋（研究室）だった処です。着てみませんか」と語っていた渡辺寛は宇野学派の中心メンバーであった。以後1970～80年にかけて、中産階級を意識する労働者階級の腐朽性（大内力）とか、労働者階級全体が日和見主義に陥ってしまった（馬場宏二）という、「労働者階級変質論」が、産業構造変化を捉えた渡辺寛理論を初め宇野学派から「相対的高賃金」要項的労資関係（社畜として構造化）として提出される。

「反発するレーニン主義者の労働貴族論（例）帝国主義論と現代経済」は、総評解散、連合結成、さらに労組の組織率が労働者の20%を割った現実を前にして、あれこれの反発は封じられた。現実、馬場宏二の主張のように、賃金上昇による労働

※（26頁2段目へ）

レーニン葬送に抗う

「レーニンの奪還」

書評：スラヴォイ・ジジエク

寄稿

「迫り来る革命 レーニンを繰り返す」

津村 洋

レーニン葬送に抗う「レーニンの奪還」

書評：スラヴォイ・ジジエク
『迫り来る革命 レーニンを繰り返す』

2005年7月15日 津村洋
(『国際主義』編集会議IEG/コム・ネット)

0 はじめに
レーニンを足蹴にする
時流に抗して

カンボジアにおけるポルポト派の大虐殺、1979年のベトナムのカンボジア侵攻、中国のベトナム侵攻などを経て、1980年代には「マルクス葬送派」が流行した。さらに、東欧とソ連邦の既存体制の瓦解を受けて、1990年代にその勢い

は時流となった。21世紀の今日、マルクスについては、いまだその正否をめぐって多様な評価が散見されるが、レーニンにいたっては今やほとんど嘲笑の対象であり、あるいは見向きもされない。

日本ではこの間、雑誌『情況』が例外的にレーニンに着目している。「」。しかし、世界に目を向ければレーニン再評価の動向はそう珍しくもない。とりわけ、スラヴォイ・ジジエクの言説は注目に値する。岩波書店が

つい最近、スラヴォイ・ジジエク『迫り来る革命 レーニンを繰り返す』を翻訳・刊行したのも、おそらくそんな流れを考慮してのことだろう。

今回、この書評を書こうと思いついたのは、けいして上述の理由だけではない。日本のあまたの知識人同様に、日本的な左

翼世界、『共産主義運動年誌』や『コム・ネット』にかかわっているなかにも、レーニンをあしざまに否定する同志友人たちがいるからである。1917年のロシア十月革命が、革命ではなくクーデターと裁断され、レーニンは単なるクーデターの首謀者と否定される時流に抗し、同志たちとの論争を望み、かつ歓迎したいと思いつつ。

1 今現在にアクチュアルな共産主義

スラヴォイ・ジジエクは、旧ユーゴスラビア・スロヴェニア出身の革命的思想家であり、特異なヘーゲル論をはじめとする哲学、精神分析、大衆文化(ポピュラーカルチャー)、ヴァーチャルリアリティーに至る多様

な著作をなし、日本でも次々に翻訳刊行されている。そのジジエクは、マルクス・エンゲルス『共産党宣言』刊行150周年を記念してクロアチアのザグレブで出版されたその150周年版への序論に次のように記した。[3]

――

ここでの「グローバリゼーション」を私たちは、国民国家という形態はもとよりのこと、ありとあらゆる地域的で民族的な諸伝統をも脅かしている、統合された世界市場による野蛮な圧迫と理解している。だがこうした状況の下でこそ、『共産主義者宣言』で描かれたブルジョア階級の社会的インパクトは、これまでになくアクチュアルなものになってはいないだろうか？

2 レーニン主義に着目するジジエク

以上がいまだ『共産主義者宣言』が意味をもっている理由である。おそらく『共産主義者宣言』が書かれた時代以上に確固たるものとして、というの『共産主義者宣言』が描きだした危機は、今日、耐えられないほどの緊張という新たなレベルにまで強められているからだ。現代に生きる私たちに『共産主義者宣言』が与える教訓は、「グローバルな市場リベラリズムあるいはファンダメンタリズム」というディレンマが偽りのディレンマだということである。社会的敵対が資本主義的経済のさらなる拡大とそれへの政治的対応である多文化主義的デリベラルな民主主義によって解消される、などといういかなる希望も誤っている。

――

見での通り、新自由主義的・帝国主義的なグローバリゼーションが世界を席卷する今日において、今から150年以上前の1848年『共産党宣言』の革命的意義を蘇生させようとしている。当時のマルクス・エンゲルスの綱領的文書を、過去の古典としてあつかうのではなく、その現代的意義を甦らせようとする着眼におおいに共感する。

今日生じていることは、反資本主義闘争が強力なものになりつつあるだけでなく、それが再び構造の中心的役割を担いつつあるということなのだ。ポストモダン政治学のおなじみの物語は、階級本質主義からアイデンティティを求める多数の闘争というものだった。今日、この潮流はついに反転された。第一歩はすでに踏み出されている。承

認を求める多数の闘争から、反資本主義へというものである。その次に来るものは、「レーニン主義的」な段階、すなわち政治的に組織された反資本主義へと踏み出すことである。[4]

――

ジジエクのこういう展開を目的の当たりになると、いささか古典的なレーニン主義像ではないのか？といぶかつてしまう。

が、しかし、1980年代から90年代にかけて、階級概念を否定したり、おそらくかつての大日本帝国軍の常套句がふさわしいだろうが、論争も分裂もなく組織をあげて共産主義から転進したり、そうした日本の左翼に比してはるかに優れているのではないだろうか。たとえば、BMS(旧戦旗・共産主義者同盟、いわゆる日向派)のように、ある日突然、左翼的アイデンティティをカルト的に放棄し、手のひらを返したようにマルクスの共産主義を足蹴にするような陳腐さと比べればよい。

いったいマルクスのな階級概念なしに、世界の反グローバリゼーション運動とどうやってつきりむすび、連携しうるのだろうか？それに比し、現在のグローバリゼーションの袋小路を打破し、反資本主義を徹底し、権力を打倒し、どう革命していくのかという見地に即応する面で、

3 「レーニンの奪還」におけるジジエクの見地

2001年2月、ドイツのエッセンに多くの論者を集めて、「レーニンの奪還」「レーニン後に真理の政治はあるか」を統一テーマとしたレーニンについて

の会議が開催された。今回岩波が発行した『迫り来る革命レーニンを繰り返す』は、そこで読まれたジジエクの文書

を源とし、2001年から2002年にかけて出版されたいくつかのバージョンを元に翻訳されたものである。

この著作は、批判点ももちろんあるが、すぐれた着眼点を有している。その点をまず、いくつか重点的に、以下引用しつつ列挙しておきたい。(以下の引用ページはこの著作からのもの)

第1：時代に即して歴史を遡及する見地

ジジエクは語る。「確かなこととは、現代の左派が、進歩的運動が無傷でいられた時代の終焉といった強烈な経験、みずから

のプロジェクトの基本的座標軸を提案しなすことを強いる

うした経験が、一身に引き受けている、という点だ。しかし、そうした今日の経験こそ、レーニン主義を生み出したあの時代の経験と酷似している。」p.2

1914年、第一次世界大戦に際して、当時の第二インターナショナル諸党が、のきなみ愛国主義に傾き、祖国擁護つまり

自国の戦争に賛成していったとき、それは天地が崩壊するほどの社会主義運動のカタストロフィーに他ならなかった。レーニンは、ドイツ社会民主党の日報が賛成投票したと伝える記事を、でつち上げと疑ったほどだろう。たえ、衝撃を受けた。

ジジエクは、絶望の淵に立たされた1914年から1917年ロシア革命にいたる苦難の時代、なかならず17年二月革命から十月革命にいたる激動の数

カ月に即応して、レーニン主義の意義を現代に甦らせようとしている。

第2：反グローバリゼーションの次の段階

すでに『イラク ユートピアへの葬送』から引用したが、再びジジエクは言及する。

「普通は『シアトル』という名のもとに表示されている一連の抗議行動を思い起こしてみればよい。『タイム』誌から『CNN』

に到るまで、突如として『真面目な』抗議者たちの群衆がマルクス主義者によって操作されていると警告を発するほどのパニックに陥ったマスメディアの

反応が、それを証している。現在の問題はまさにレーニ的な

問題である。すなわち、メディアによる(赤という)糾弾を現実のものとするためにはどのようにならなければならないのか、が問われねばならないのだ。われわれは、こうした騒擾に普遍的な政治要求といった形式を与える組織的構造をいかに発案すればよいのか？」問いかけ、「われわれは、反グローバリゼーションを資本主義に対する別なる『抵抗の場』へと訓育してしまうことなのだ。」と諭す。p.204-205

ここから反グローバリゼーション・反資本主義の次の段階を提示する。

第3：普遍的な政治要求・組織的構造・党

反グローバリゼーション・反資本主義の「レーニン主義」的段階は、普遍的な政治的要求の形式を与える組織的構造、つまり党として語られる。

「要するに、運動は、〈党〉という形式がなければ、権力への『良い』抵抗に権力の継承を要求する『悪い』革命を対峙させる『ポストモダン』な政治の大

きな合言葉の一つである、『抵抗』という悪循環に絡め取られてしまおう。」p.204

「結果から言えば、『レーニン主義』の今日における根本的教訓は、〈党〉という組織形態をもたない政治は政治(学)なき政治であり、したがって『新

な社会運動』(とまったく適切にも名付けられた)運動だけを欲する人々への回答は、ジロンの折衷へのジャコブンの回答とまさに同じである。すなわち『諸君は革命なき革命を望んでいる！』と。」p.205

かくして、新たな社会運動は普遍性を欠いた「単発的運動」にすぎないとされ、普遍性を体現した党が対置される。1970年代以来繰り返された重要な論点だ。が、こうした「レーニン主義」理解なら、それはスターリン主義的な共産党や革共同と共通している。

第4：国家・民主主義批判と反資本主義

ジジエクは、民主主義がよつてたつ資本主義的な私的所有を明示して反資本主義を訴える。「民主主義の限界は国家である。国家はそれが代位一

表象する有象無象から見てつねに過剰である。……こうした過剰がまさに民主主義によって構造的に看過されている。……民主主義という幻想は、民主主義的な過程が国家のこうした過剰をコントロールできると考える

点に胚胎するのだ。だからこそ反グローバリゼーション運動、だけでは不十分なのだ。ある点でわれわれは、『自由と民主主義』への依拠といった自明とされて

いる事柄それ自体を問題視せねばならない。そしてここにこ

そ、今日におけるレーニン主義的な教訓の究極的な核が存在している。」p.160

こうして、リベラルな議会制民主主義という資本主義がまとう政治形式を問題視し得ない反資本主義を批判する。ついで、資本主義の限界が資本主義それ自体と正しく指摘し、資本主義にとつてかわる構成体(共産主義)が可能かと問を発している。が、その解はいまいだ。キューバの映画をなぞりつつ、社会発展の加速ではなく、「時間」が静止する空間」p.168という逆説を提示してとしている。

第5：政治闘争と理論

ジジエクは、「先取的な政治闘争にとつて理論的知識は無力に等しいと考える人々」、たとえ有名な行動的知識人であるノアム・チョムスキーを含む人々に直面し、次のように語る。「まさにそうしたときこそ、『高度な理論』が現代のもつても具体的な政治闘争にとつても依然として妥当であることを強調することが、決定的に重要なのだ。」p.8

この点は、まさにレーニン

『何をなすべきか』の核心に

つらなる論争点であり、現代における『経済主義』批判ともいえる。

第6：レーニン主義とスターリン主義

レーニンに様々な弱点や限界があったことは言うまでもないことだし、ジジエクも同様に捉えている。しかし、彼は次のように断言する。

『レーニン主義とはまったくスターリン主義的な観念なのだ。・・・スターリン主義の真正な核芯である『レーニン主義』をレーニン時代のアクチュアルな政治的実践とそのイデオロギーから弁別することが決定的に必要である。レーニンのアクチュアルな偉大さは、レーニン主義というスターリン主義的な真正神話とは無縁である。』
p64

レーニンとスターリンとの連続性、その面をけして過小評価すべきではない。しかし、1917年革命の数カ月を焦点をあてつつ、ジジエクがレーニンとスターリンを決定的に区別しようとするのは、事実上革命などどうでもよいという人にとって別だろが、まさに正当な政治評価である。

(これ以上「プロレタリア通信」の紙面をとるわけにもいかないのでもう一端中断します。この後半は、「4 ハート/ネグリの『帝国』批判とその逆ベクトル」5 1917年の社会一経済的分析の具体性について「6 『レーニンを反復する』とはどういうことか？」が続きですが、それはIEGサイト：<http://www.ngy.ist.ne.jp/>

1.ieg/で1覧下さい。)

「1」 白井聡「カノの降臨レーニン『国家と革命』の一元論的読解」『情況』2005年5月号

「2」 スラヴォイ・ジジエク『迫り来る革命 レーニンを繰り返す』岩波書店 2005

「3」 スラヴォイ・ジジエク『まだ妖怪は徘徊している！』情況出版 2000 pp.3-4 および pp.76

「4」 スラヴォイ・ジジエク『イラク ユートピアへの葬送』河出書房新社 2004 pp.134-135

※(23ページ末尾より)

力商品所持者の地位向上が、息子や娘を生み育てる小商品生産者になつたと幻想させ、労働者は「会社人間」として企業体制とマイホームの中に《穴》もり《は松尾匡流に》いえば20世紀の逆行コースとなる。

もし《穴》もり《は》に出口があるなら、ひとつは青柳和身が力説しているように、世界的「ジエンター革命」が、労働単位をシングル化させ、もう一つは国際統合や情報処理機構の発達で20世紀とは比べものにならない条件を入手していることにある。

この論文は「年誌」6号に寄稿したうち、「一般労働者の意識(私生活型合理性II核家族)の変化について」の補足である。(了)

※18頁下段より

日本はまさに朝鮮を搾取し飢餓の危機に陥れていったのです。

さらに日中戦争、太平洋戦争と戦線が拡大する中、兵士が不足しました。そこで朝鮮半島から朝鮮人を兵士として動員して行きました。私の知人であった故・石成基(ソクソング)さんは、在日の一世で朝鮮半島から日本軍属として戦争に参加させられ、右腕を失いました。戦後、日本人の元兵士達は障害年金などの補償を受け取る事が出来ましたが、石さん達の日の人々は日本人でないという理由で何の補償を得る事も出来ませんでした

た。戦後数十年に渡り戦後補償を政府に求め続け、運動の結果、2001年に弔慰金と呼ばれる見舞い金をようやく受け取る事が出来ました。しかしこの弔慰金は日本人が受け取る額の10分の1以下でも民族差別、国籍差別が存在したのです。私は彼の苦難の人生の一端を知る者として、植民地支配と戦争は彼のような無数の朝鮮人の人生を台無しにしてしまったという事を思うと貴労組のように植民地支配は良いことだったという発言を決して許すことは出来ません。植民地支配は間違いなく朝鮮半島にとって有害なものであったのです。

貴労組は日本人であることに誇りを持ちたいと言いますが、それは自分に都合の悪い歴史は忘れ去って、他国を馬鹿にした事で築かれる歪んだ自尊心であり、アジア諸国と関係が悪化するばかりです。相手を傷つけて自分が優位に立ったような感覚になり、それで自分の誇りを取り戻すというのは本当の誇りではないと思います。日本だけが正しいという態度を改めて、歴史的事実を見つめてください。今回の文書を早急に撤回し、謝罪を表明する事を要請します。

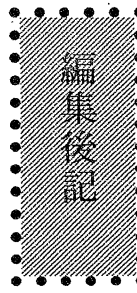
のだったのです。

前号の発行から半年たったが、この半年の間に実に多くのことがあった。イラク情勢は米帝にとっていよいよ泥沼化しており、米帝は「進むもならず、退くもならず」で、米兵の死者は確実に増大している。反戦運動は新たに広がり、そこへもつてのカタリーナ被害は、今日のアメリカの断裂状況を浮き彫りにし、アメリカこそ泥沼なのだ、全世界にさらけ出した。

日本では、JR尼崎の重大事故に震撼し、国鉄分割民営化以来ひた走ってきた路線の帰結と。その道は大々的なリストラと、非正規雇用労働者を大量化しながら、社会のあらゆる分野に弱肉強食の競争と二極化を激化させて進んでいる。多国籍企業・IT化・金融市場のグローバル化と競争の大波・強まる金融資本支配・・・

対外的には、中国・韓国の世界市場での強力な台頭と日本の支配階級の危機感を基底に、靖国・歴史問題、領土・資源問題等での中韓両国との対立、排外主義の跋扈・・・

戦後60年はあたたかも戦後日本のだん詰まりを迎えるような。その第一幕目に今回の「小泉扇動劇場」選挙とその圧勝があった。で、第二幕は？



プロレタリア通信バックナンバー

- 反戦-反グローバリズムと帝国主義打倒 共産主義運動再建の諸問題を毎号提起
- 連載「国鉄労働運動の現段階」全3回 今号の座談会「JR尼崎列車大事故・・・」と併読下さい。
- 各戦線からの報告と提起、寄稿

共産主義運動年誌6号

- 反戦-反グローバリズムから帝国主義打倒へ 帝国主義の現在
- 共産主義運動の組織問題
- 運動の現場からの提起
- 革命論・共産主義論へのアプローチ